聖剣と魔竜の世界 1

サイトウケンジ

OVERLAP

聖剣と魔竜の世界 1

The World of Sword and Dragon

サイトウケンジ

illustration by 黒銀

OVERLAP

序『魔竜宣言』

The World of Sword and Dragon

『これより魔竜による全世界に向けての宣戦布告を始めます』

クリスマスイヴのゴールデンタイム。

全世界同時中継という前代未聞の電波ジャックは、そのひと言から始まった。

『この宣言は様々な国家の権力者の力を借りて、テレビやラジオなどのメディアを通じ放送しています。全世界の方々は是非お聞き下さい。そして、各メディアの方は繰り返しの放送を宜しくお願いします』

まず目につくのが長くて美しい銀髪と、青くて透明感のある瞳。

日本人的な美的感覚からして『美少女』と言って差し支えないほどの整った顔立ちは、その無表情さも相まって浮世離れした雰囲気を醸し出している。

一見してどこかの国のお姫様か、大金持ちの令嬢に違いないという高貴な風情まで漂わ

イラスト／黒銀

せているのは、綺麗に誂えられた軍服のような豪奢な衣装に身を包んでいるからだろう。

『と、いうわけで。皆様初めまして、私は魔竜のアーリアン＝D＝ハクア。仲間からはアーリ、もしくは魔竜姫と呼ばれています。『六皇魔竜』という魔竜団体で指導者的な立場をしています。皆様、少しの間、私の話をお聞き下さい』

自らを魔竜と名乗る少女、アーリアン。

あくまでも丁寧、あくまでも淡々と。淀みのない口調で、用意された原稿をそのまま語るかのように、彼女はカメラに向けて続ける。

『さて、どの国でも圧倒的な恐怖の対象として、伝承や神話の中で描かれている最強の幻想存在……それが『竜』です。この場合中国の漢字を使った『龍』でもＯＫです。いわゆる、英語で言うところのドラゴンですね。

実は、それら『竜』が登場する物語というのは、かつての人々が私たち魔竜のことを『とても怖いもの』として描き記したものでした。

映像で見ている方は解るかと思いますが、私の姿は見ての通り普通の人間です。身体機能も人間と変わりません。私たち魔竜は、外見上は人間と何も変わらないのです。

それでも、私は『人間』ではなく魔竜なのです』

カメラはアーリの姿を大きく捉える。

整った顔立ちから始まり、ゆっくりと――カメラは下に向かった。

年頃の少女にしては大きめの胸、引き締まった腰のライン、そしてスカートから伸びる白い太もも。スタイルだけでも既に女性としての魅力の高さを窺わせている。

『魚は生まれた瞬間から泳ぐ存在です。鳥は生まれた瞬間から飛ぶ存在です。私たち魔竜は世界を蹂躙したり破壊したりビックリさせたり、とにかく派手なことをして恐れられたり畏怖されたり敵対されたりする為の存在なのです。

人間に恐怖と絶望を与え、その心を乱し、戦争を引き起こす為の存在……と言えば、通じるでしょうか』

アーリアンの目がアップで映し出される。

その瞳には全く感情が浮かんでいない。興奮したり、緊張したり、楽しんだり。

そういった様子が全く感じられない、完全に透明な視線。

『――私たちは普通の人間の母親から生まれましたが、生まれながらにして魔竜の力を持っていました。おかげで両親に気味悪がられて可哀想な人生を歩み、ひねくれてしまっ

た者もいます』

ここでようやく、アーリアンは静かに目を閉じる。

それまで瞬きもしなかった彼女の、初めての表情だった。

『ですが、それはおそらく社会が悪いのであまり私は気にしていません。もし、この映像を見ていて心当たりのある国の政府の方は、児童迫害問題を注意してさし上げて下さい』

演説の中に、僅かな笑みと共に社会風刺の籠ったユーモアが混ざる。

視聴者が思わず苦笑いをしてしまいたくなるような言葉のおかげで、とても共感出来ないこの演説を聞いている中には、その内容が身近なものになった気がしてしまう者もいた。

それはひとつの演説テクニックでもある。

『さて、話が逸れましたが、私たちは魔竜としてこの世界を恐怖であったり絶望であったりする『恐ろしいもの』で包むことが目的です。その後崇められたり、退治されたりするのは、また別の話だったりしますのでおいておきます。まだよく解らない方は『愛玩動物』の反対で『畏怖される脅威』がいる。そういう存在の人たちがいて、そういうことをするんだな、となんとなく思っていただけると幸いです』

あくまで自分と、それに連なる魔竜たちは『人間ではない』というのを強調しているアーリアン。

『私たちの行為はテロの宣言と思われるかもしれませんが、別に要求するものはないので、各国政府の皆さんは安心して下さい。あくまで私たちの力の誇示と存在理由を示すだけのものです。――それでは、こちらの映像をご覧下さい』

アーリアンの背後にある大きなモニターに映像が現れる。彼女がその身を横に避けると、どこかの国……ヨーロッパ風の建築物が並んでいる街並みが映し出されていた。画面の右下には中継を意味する『ＬＩＶＥ！』の文字が輝いている。

『こちらは、とある国のとある街です。住民は全て、先達てその国の軍隊が避難させてあります。そして、この街はたった今――』

その時、低い地鳴りのような音と共に――その映像の街が揺れ始めた。直後、その上空に巨大な球体が現れる。それはどうやら、大きな水の塊だった。

『私たち『六皇魔竜』の手によって消滅します』

瞬間、激しい揺れと共にいくつかの高い建築物が沈み始め、街のいたる所からは巨大な火柱が立ち上り、そして上空の水の塊はゆっくりと街に落ちて――。

『これが、魔竜の力です』

ザアアアア、と様々な破壊の音が全て混ざったような轟音と共に画像が乱れ。

最後に、ありとあらゆる建造物が瓦礫の塊になっていくさまを。街が崩壊していくさまを見せつけながら。

そのまま――ブツン、と画面は真っ暗になってしまった。

『どうやら撮影機材も壊れてしまったようなので、別のカメラに切り替えます』

アーリアンが淡々と説明した途端に、改めて画面が映し出される。

さっきの映像よりもやや離れた場所からの撮影。ヘリコプターのような高所からの中継に切り替わった途端、そこにはおよそ人々が見たことのないもののシルエットがあった。

『こちらが、私の仲間。魔竜たちです』

完膚なきまでに破壊され、未だに土煙を上げているその街の中央。

そこには地球上に確認されているどの生物とも違う、巨大な影が三体、浮かんでいた。

中でも一際目立つものの特徴は……長い首、鋭角的な体軀、そして蝙蝠を連想させる複数の飛膜を持つ翼。

強いてイメージを上げるとすれば恐竜。だが、こんな形をした恐竜はどこの国からも発掘されていない。

そう、それこそ正しく『竜』と呼ぶに相応しい生物。

怪獣、モンスター、邪神。国によってイメージは違うだろうが、それほどの破壊を伴って顕現した存在がそこに立っていた。

『さて、これで私たち魔竜のことを多少はご理解頂けたかと思います。我々魔竜は、人間の軍隊をもってしても、対抗することが出来ません。魔竜は通常の人間が使う銃器や兵器では、その鱗や生命活動に影響を与えることが出来ないからです。既にいくつかの国が私たちの本拠地を攻めて来ましたが、私たちに傷ひとつ負わせることは出来ませんでした。ヨーロッパ北部の、偉い方々はご存知の通りです。また、私たちは一般の方たちを傷つける意思は今のところありませんので、そこはご安心下さい』

背後の映像が再び切り替わる。画面は、どこかの国の軍隊が壊滅している様子を映し出していた。『怪我人数名、死者ゼロ』という表示もまた、彼女たちが大いに手加減して人々を退けたことを意味している。

『私たちに歯向かうということは『神話』に歯向かうということと同義。つまり、対抗するには同じく神話レベルの存在でなければならない道理です。勿論、そういった存在もあります。

――この世界には、一般的には極秘にされていますが……私たち魔竜を退治出来る武器、聖剣と呼ばれる道具があるのです。

今まで世界の裏側で、私たち魔竜と聖剣は多くの戦いを繰り広げてきました。

ですが、隠れて魔竜を狩っていた聖剣所持者の皆さん。これからは正々堂々と表舞台で戦うことにいたしましょう。そして一般人の皆さん。私たち魔竜はいつどこにいてもおかしくありません。存分に恐怖して絶望して下さい。よろしくお願いします』

そこでアーリアンは……大真面目な顔のまま、丁寧に頭を下げた。

これから絶望させにいく、この映像を見ている全世界の人類に対して。

ただただ『怖がれ』という意味だけの礼をする。

『とりあえずですが、私たちは魔竜と聖剣が複数人存在しているという報告の入った都市。日本にある『美影開発都市』に向かいます。そこで仲間探しと敵探しもしながら、恐怖推進活動、絶望活性化運動を進めさせて頂きます』

そして背後のモニターに映し出されたのは、日本にあるモデル都市のひとつ『美影開発都市』。海上の島に建てられた、最も新しい開発都市のひとつ。

『さあ、というわけで』

その街を背景に、アーリアンは大きく手を広げる。

『これから『聖剣と魔竜の世界』を始めましょう』

第一話『魔竜邂逅』

The World of Sword and Dragon

ヒュ――――ン……ドゴオオオオオオオオオオオオン!!

それはもう、恐ろしいくらいの爆発音だった。

普通に家に戻る為の道を歩いていたら、突然それは起こったのだ。

『あれ、空から何か落ちて来たな』と思った瞬間にはもう轟音と地面の揺れで大変なことになっていた。髪が爆風で逆立ち、肌に熱がビシバシと当たって痛い。なんとか風圧で吹き飛ばされずにいられたのは奇跡だろう。

ようやく目を開けられるようになってから、もうもうと立ち込める土煙の方を見る。次第にその煙が晴れると、俺の左に広がっていた開発用の空き地はクレーターになっていた。

「なんだ、爆撃か？　ミサイルか？」

昨日の『魔竜姫』による宣言もある。すっかりリアルタイムで見てしまった俺は真っ先

にそれが浮かんでいた。あんな宣言をした以上、俺の住む『美影開発都市』にどっかの軍隊からこういう攻撃があったとしてもおかしくないはずだ。
早く逃げなきゃとは思っていても、あまりのことにまったく体が動かない。
もう一歩だけ左を歩いていたら俺の体は木っ端微塵に吹き飛んでいたのだろうか。
想像するだけで背筋がゾッと寒くなる。

「ふぅ」

そしてそのクレーターの中心には一人の人影があった。元々そこに立っていたのだとすれば吹き飛んでいるはずなので、もしかして飛来してきたのはミサイルではなく――そこにいる、銀髪の少女なのだろうか？
彼女はちょっと乱れた長く綺麗な髪を軽くかき上げると、キョロキョロと周囲を見回した。透明さを感じさせるブルーの瞳はサファイアのようにどこかキラキラと輝いている。整った顔立ちと透き通るような白い肌は、土煙の中で輝いてさえいるようだった。まだ爆心地では風が吹き荒れているのか、スカートがヒラヒラしていたりする。
そして、立ち尽くして見ている俺と彼女の目が合った。

「こんにちは。貴方は？」

「あ、ああ、こんにちは。俺は月夜野、カガリだ」
いきなりの挨拶に、ついつい返事をしてしまう。
爆心地に立っていた少女は俺を見ると、スタスタと近寄ってくる。
幻想世界からそのまんま抜けだしてきたかのような雰囲気の姿は――昨晩、テレビで見た少女そのままで――。すぐに、名前に思い至った。

アーリアン＝D＝ハクア。通称アーリ。

クリスマスイヴに全世界の放送局を一斉ジャックして『魔竜宣言』を行い、一躍世界的に有名になった『魔竜姫』。そんな人物が突然降ってきて、俺の方にゆっくりと歩いてくる。恐怖とか警戒とか、そういったものはすっかり麻痺してしまっていた俺は、全く動けないでいた。
「私はアーリアン。通称アーリ」
「うん、昨日テレビで見たよ」
そんな自己紹介をされても正直困る。体は動かないのでせめて口は動かし続けた。
「私を見ても逃げないの」
そりゃあ、自分の存在を『恐怖』とか『絶望』とか言っていた彼女だ。

昨日の宣言をよしんば見ていなかったとしても、クレーターを作って登場した段階で普通の人なら逃げると思ったのだろう。

だが俺は、思わず……。

「よくドラマでさ」

普通に話しかけていた。

「ん？」

「何か爆発とかがあった時に『ひぃぃぃぃ』とか言いながら、主人公たち以外の群衆が逃げていくシーンあるだろ」

「うん、ある」

「あれは嘘だな。普通、すっごい衝撃的なことがあれば立ち尽くすよ、こんな風に」

つまり今の俺である。

人間、あまりの事態になると冷静な判断が出来なくなるのだ。

「なるほど。確かに、一理ある」

そして俺の言葉にすっかり感心している魔竜の姫君だった。

「それで、えーと。足とか大丈夫なのか」

相手はとても凄い存在なのは解っているのだが、つい話を繋ぐ為に尋ねてしまう。

すると彼女は、何かに気付いたように視線を下に向けると、自分の足を持ち上げてプラプラと振ってみた。

「ちょっと足が痺れていたけどもう平気。落下の衝撃はほぼ消すことが出来た」

「それは何よりだ。ところで俺、もうちょっと左を歩いていたら木っ端微塵だったよな」

「それもギリギリ大丈夫に調整して落ちてきた」

俺に被害が及ばないように落ちてきてくれたらしい。

「どこから？」

「空から」

「まあ、そうだろうな」

もうツッコミなど入れるものか。

あんな登場をしたくせに全く動じていない、淡々とした喋り方。見たところ傷ひとつ付いていないし、着ている制服にも土汚れなどは何もない。本当に色々調整したのだろう。

「うん？　制服？」

色々なことが衝撃的過ぎて気付かなかったが、彼女が着ている服は昨日の宣言時のものとは違っていた。なんとも見覚えのある制服だ。

俺の通う『都市立美影中央学園』高等部女子の制服にとてもよく似ている。

……まさか。

「実は、美影中央学園に行きたい」

「だと思ったよ！」

その制服を趣味で着てるとかでなければ、そりゃ学園の生徒だよな。早速ツッコミを入

れない誓いも反故になってしまう。
「案内して欲しい」
「まあ、うん。命が惜しいからそれは別に構わんが」
「大丈夫、一般の人は殺したりしないから」
「そうなのか？　そういえばそんな宣言もしてたけど」
「大物の余裕」
なるほど。多分ここで『ひぃぃぃ、怖いー！』とか言いながら逃げたとしても、この少女は許してくれるはずだ。そういう、懐の深さみたいなものを魔竜のリーダーには是非持っていて貰いたい。これは俺の希望だが、その希望と彼女の意志は割と合っているらしい。
「まあ、案内くらいは構わないよ」
「うん、ありがとうカガリ」
呼び捨てかよ、と思ったけど、このお姫様に『カガリ君』とか『カガリさん』とか呼ばれるのも確かになんかイメージが違う。
「で、アーリさん。案内だけでいいんだよな？」
「アーリ」
「うん？」
「私はカガリと呼ぶ。だから貴方はアーリと呼んで」
そこはこだわりの部分だったのか。しかも結構語調が強い。

「……解った、アーリ。学園まで案内するだけでいいんだよな？」
「うん。だけでいい。空から確認したけど、学園はあっち？」
アーリが指差したのは全くの反対方向だった。そっちは俺の家だ。
「いや、全く反対だ」
「……日本の土地は複雑……」
この少女、もしかして方向音痴なのかもしれない。
いきなり魔竜の姫君の弱点（？）を知った気分だ。
「まあ、うん、いいよ。こっちだよ」
「ありがとう」
世界を恐怖に包むとか宣言した人物に、翌朝感謝されるとは夢にも思わなかった。
そんなわけで、俺はクリスマスの日の朝から、世界中に喧嘩を売った魔竜のお姫様と共に過ごすことになってしまったのだった。

「実はカガリに伝えておくことがある」
歩く道すがら、いきなりそんな告白をされた。
「どんなことでしょうか」
思わず畏まって尋ねると、アーリは目を真剣そうに細め、
「実はこの街には暫く滞在する予定」

「いや、昨日テレビで言ってたよな」
まさかの知っていること告白だった。
「なら話は早い。今後ともよろしく」
「あ、ああ、よろしく」
奇妙な縁でこうして案内する羽目になったわけだが。
こうして一緒に歩いている分には歳相応な普通の少女に見えた。
いや、見た目はビックリするくらいの美しさではあるが、隣で話して歩いている姿を見ていると『アイドルを生で見るとこんなもんなのかな?』みたいな気分になる。
ここはもう、せっかくだから色々聞いてみるとしよう。俺は安全らしいし。
「んで、どうしてこの街なんだ？　壊滅させると怖がらせられる都市なんていっぱいあるだろ。それこそアメリカの主要都市とか、ヨーロッパのどこかとか」
そこの都市の人々すまんとは思うが、ピンポイントでターゲットにされた街の人々はそう考えてしまうのを許して欲しい。
「威圧だけならそういう場所も考えたけれど。この街には何人か私たちの仲間である魔竜や、敵である聖剣がいるらしい」
「マジでか」
「マジ情報」
いつの間にか俺の知っている穏やかのんびりな『美影開発都市』はそんな魔竜と聖剣が

跋扈する魑魅魍魎の街になっていたようだ。
「いるらしいってことは、アーリはそいつらのことまだよく解ってないのか?」
「うん。私はまだ聖剣にも会ったことがない。でも聖剣は私たち魔竜の気配を摑むことが出来るはず。だから堂々とうろうろしていれば向こうから来てくれるかと」
曖昧極まりない探し方だった。
「そんな聖剣と楽しくバトルしたり、後は魔竜と仲良くなったり。そういうことをジャンジャンやりに来た」
「ジャンジャンやるのか……」
「うん。ジャンジャカ」
ちょっとアレンジされてもツッコミづらいな。
「でも、そんなにバトルしまくったりするなら、学園に通ったら大変なんじゃないか？えーとほら、日中は基本授業に縛られるし」
『魔竜姫』に対してそんな常識を語るというのも不思議な気分だが。
「私はラスボスだから」
「ん？」
「他の仲間がやっつけられるまでは普通に過ごす」
「……へぇ」
他の仲間がやっつけられるの前提なのか。映像で見た限り、彼女らはとてつもない力を

持っているらしいのに。でもアーリは仲間たちが負けることを踏まえているのだ。
なんかその価値観は面白いな。『絶対強者』だから負けない、とかではなく、悪のチームだからいつかは負けると思っているだなんて。
「でも、やっぱり他のお仲間も強いんだろ？」
「それはもう、スーパー強い」
「そんなリーダーであるアーリはどれくらい強いんだ？」
「それはもう、オメガ強い」
「オメガなのか……」
スーパーとオメガの間にどれくらいの距離感があるのかは不明だが、なんとなーく伝わったので納得しておく。
「そう」
得意げにちょっと胸を張っているアーリ。その大きさと形の良さは服の上からでも解ってしまい、『ああ、こりゃ強いわ』と納得した。
こいつ、かなり怖い存在なはずなのに、当人は妙な可愛げがあるよな。
「カガリは美影中央学園の生徒？」
「ああ、今高等部一年で、今度二年だよ」
「じゃあ私もそうする」
「じゃあってなんだ。いや、年上っぽい落ち着きはあるけど何歳なんだ？」

「今年十六歳になった」
「じゃあ同い年だなあ」
「でしょ」
この淡々とした会話を楽しいと感じている自分がいる。同い年なら別に同じ学年になってもおかしくないのだが、さっきの『じゃあ』はアーリも俺との会話を楽しんだから、というニュアンスを感じた。真意までは解らないものの、好意的なら良いことだ。
命拾いもし易くなるし。
「生徒たちもビビるだろうなあー」
「カガリは怖くないの」
「怖いに決まってるだろ」
それはもう即答だった。多分、このアーリがちょっと『あ、殺そう』とでも思えば、俺なんかひとたまりもないのだろうし。
「そっか」
俺の返事を聞いたアーリは上機嫌に見えた。怖がられた方が嬉しい。だけど普通の会話をするのも楽しい。そんな状態らしい。
――変な女だなあ、ほんと。
少なくとも俺の価値観ではさっぱり理解出来ない存在だった。
そうこうしている内に、我が校に辿り着く。

「と、いうわけでここがお目当ての『都市立美影中央学園』だ」
校門の前までアーリを案内すると、アーリは……そのあまり変化のなかった瞳をなんとなく輝かせていた。
「どうした？」
「『学校』というものに入るのは初めて。だからちょっと嬉しい」
「そうなのか」
魔竜として過ごしてきた少女。それがどんな生い立ちだったのかなんて、俺には解らない。だけどもしかしたら、今後それを知る機会もあるのかもしれない。
「ありがとうカガリ。学園生活でもよろしくして欲しい」
「まあ、適度にならＯＫだ。あんまり怖がらせないでくれよ」
「それは約束出来ない」
その無表情な口元が小さな笑みを浮かべるのを見て。
——思わずその笑顔に見とれそうになってしまう。
「じゃあ、自力で職員室まで行ってくる」
「ちなみに正面に見えている一階の窓が職員室の窓だからな」
「なら簡単。行ってきます」
キリッと頷いてからアーリは歩き出す。
が、その方角は正面ではなく何故か右側、校庭の方だった。

「もうツッコミなど入れるものか」
せっかくだから校内見学でもしがてら、部活をしている少年少女たちをビックリさせまくるといい。どうせ彼女は現段階で人殺しとかはしないらしいし。他の生徒たちも俺と同じようにビビりまくるがいい。
そんな暗い気持ちでいると、持っていたスマートフォンがブブブブブ、と震えた。
妹の、灯花からのメールだ。

『兄さん、もの凄く強い魔竜の気配。学園に来たかも』

すまん灯花。それを案内したのは俺だ。
やっぱり灯花はその気配を敏感に察したようだ。
「なるべく目立たないようにしてろよ。すぐ迎えに行く……と」
慣れないフリック入力でなんとか返事を書いて送信。
そのままアーリの立ち去った方を見て。
「中等部校舎の方には行かないでくれよ、魔竜さんよ」
そう祈りながら、俺は灯花のいる中等部の図書室に向かったのだった。

その日、俺は夢を見た。

赤い竜のギラギラした目。遠くで聞こえる水の音。そして、圧倒的な絶望。
周囲には誰も助けてくれる者はなく。
視界には大事な妹が倒れているのが見える。
為す術もない。何も出来ない。生き残ることが出来ない。
そんな諦めの中。
せめて、せめて妹だけでも。
絶対者による蹂躙に対して、最後の抵抗をしようと無理矢理顔を上げて。
その瞬間――。

「わっ」

ビックリしたような、困ったような、戸惑ったような、そんな小さな声が聞こえた。
目を覚ましてまず飛び込んできたのが、視界いっぱいに広がる妹の顔。距離にして約二

◆　◆　◆

十センチくらいの所に灯花の顔がある。色の白い頬がほんのり赤くなっていて、ちょっと眠そうな二重の瞳は長い睫毛でやや隠されている。我が妹ながら儚げな雰囲気だ。守ってあげたくなる妹コンテストがあったら上位入賞間違いなしなレベルだよな。
「……お、おはよう、兄さん」
「お、おう」
緊張した声と共に温かい吐息が鼻にかかった。そんな灯花の後ろには見慣れた俺の部屋がある。時間はもう夜だろうか。仮眠のつもりが結構寝てしまったらしい。
「に、兄さんが、うなされていたから……」
うなされていたから、寝ていた俺の顔に顔を近付けた？　うん、まだ意味が解らない。
「キスでもして起こそうとしてくれたのか？」
「う……そんなことはしないもん」
灯花はちょっとふくれっ面になって顔を引っ込めてしまった。間近で見られなくなったのは物寂しいが、あのまま互いの息がかかる距離で会話していたら俺の方も心臓がバックンバックンして大変だったであろう。
「心配したから、ちょっと顔を覗きこんだだけだよ……」
「そっか、心配してくれてありがとうな」
布団の中から手を伸ばして、その頭を撫でてやる。
ふわっとした柔らかな髪の手触りが手に優しかった。

「……ん……もう平気？」
「ああ、もう大丈夫だ。あの時の夢を見ていたんだよ」
「あの時……そっか」
灯花も思い当たってくれたようだ。最近はあんまり見なくなっていたのだが、やっぱり魔竜のお姫様なんかに出会ってしまったせいで記憶が刺激されたのだろうか。
「さっき、魔竜の気配がしたから？」
「ああ、魔竜のお姫様を学校まで案内してたんだ」
「お姫様……」
途端に心配そうに俺を見つめる灯花。無理もない、昨日あんな宣言をしたアーリと遭遇していたなんて聞いたら心配して当然だ。あの後、あいつが校内で迷っているのをいいことにそそくさと逃げるように二人で帰ってきたわけだし。
「……どんな人だったの？　昨日のテレビの人だよね？」
「うむ。なんか、ボケーっとして面白い女だった」
「……そうなの？」
「俺もビックリだ」
灯花と並んで歩いたら絵になるんじゃないかな、なんて兄贔屓的な印象も持ちつつ、あんまり『危険！』って感じはしなかったのも確かだ。世間知らずっぽかったというか、むしろ優しそうな雰囲気すら感じたというか。

「まあ、一般人は殺さないらしい。大物の余裕とか言ってた」
「そうなんだね。じゃあしばらくは……平和、なのかな？」
「だといいなあ……」
魔竜のおっかない人たちが街に来るというだけで不安が募るのだ。
せめてアーリにはのんびりとしていて欲しい。
そんな風に二人でしみじみとしていると。

「灯花ちゃーん、お兄ちゃーん。そろそろ私たち出ますよーうっ」
俺たちの姉、日和姉さんの声が玄関から響いてきた。
「あ、そうだった。母さんと姉さんがもう出るよ、って伝えにきたの」
「おー、なるほど。せめて見送りくらいするか」
うん、と頷く灯花。俺はベッドから起き上がると、跳ねた髪を手で押さえながら一緒に部屋を出た。
部屋を出てすぐ左手にある玄関では、母さんがブーツを履いていた。それを姉さんがニコニコした顔で待っている。二人とも、いかにもこれからパーティです！　と言わんばかりのおめかしをしている。
「やっぱり行くのか、母さん？」

「うん。付き合いもあるからね……よっ、と」
一見すると姉さんと姉妹にしか見えない母さんは、ブーツのファスナーを上げながら笑いかけた。髪はくるくるに整えられていて、化粧は薄め。いつもそうなのだが、今日もちょっと大人っぽい女子大生、くらいにしか見えない。
「私も、お仕事のチャンスが貰えるかもしれませんし」
そして姉さんは清楚さをふんだんに醸し出すような髪型と表情で、やんわりと微笑んでいた。若者向け雑誌で読者モデルなんかもやっている姉さんは、はっきり言ってそのスタイルもルックスも一級品だ。親しみ易い笑顔がその愛らしさをより強めている。
「あんな宣言があったくらいなんだから二人とも注意してくれよ」
「ふふ、お兄ちゃんは心配性ですね」
クスクスと口元に手を当てて姉さんに笑われる。俺のことを『お兄ちゃん』と呼ぶのも、家族相手にすら丁寧語なのも姉さんの癖だった。
まあ、家族での呼称がそのまま相手を示す名前になることはよくあることだろう。電話口などで家族の父親が『あー、お父さんだけど』と言うことも普通のはずだ。
今でもたまに「お兄さんなんですか？」と尋ねられたりすることもあるが、そういう時姉さんはクスクス笑うだけだったりする。
「カガリくんは灯花ちゃんのことをきちんと守ってあげてね？」
「そこは任せておいてくれ」

俺の返事に満足そうに、母さんはブーツを履き終えて、鞄を持ち上げる。
「灯花ちゃん、『ミカゲタワーまんじゅう』買ってこようか？」
「うん、ぜひにっ」
母さんの提案に灯花が即答するのを聞いて俺はつい笑ってしまった。そんな俺を抗議するような上目遣いで見てくる灯花。
「う……、好きなんだもの」
「うん、後でお茶でも淹れてみんなで食べようぜ」
「……うん」
照れくさいのか、顔を俯ける妹の様子に玄関の二人もニコニコしていた。
「クリスマスなのに二人してごめんね？」
「いいって。仕事の延長みたいなもんだろ」
母さんと姉さんは、市が主催する立食クリスマスパーティに招待されたのだ。場所は港にそびえ立つ高さ三百メートルの『ミカゲタワー』展望台。我が都市を代表する『美人推理作家である母親』とその『読者モデルで名を上げた娘』という二人なのだから、呼ばれるのも当然だろう。いるだけでそのパーティ会場の花になるという意図もあるに違いない。
凡人である俺と灯花はこうして家で留守番だった。
「お兄ちゃんと仲良くするんですよ？」
「うん。ほどほどにするよ」

姉さんに返事する灯花に、ほどほどなのかよとツッコミそうになる。
「お兄ちゃんは、二人っきりだからってえっちなことしちゃダメですよ？」
「しねえよ!?」
えっちなことて。見た目は清楚な姉なのに、ほんとにこういうネタが好きなのだ。灯花が影響を受けてしまったらどうするつもりだろう。全く。
「うふふっ」
クスクスとお茶目にウィンクなんてしている。普通、そんな仕草が似合うのはアイドルか二次元少女くらいなものだが、我が姉はウィンクの似合う少数派の一人だった。
「じゃあ行ってくるねー」「行ってきまーすっ」
「おう、気をつけてなー」「行ってらっしゃい、母さん、姉さん」
母と姉の声が同時で、俺と灯花の返事が同時。
そんな出かける組と留守番組のシンクロっぷりだった。
バタン、とドアが閉まるのを見つつ……。さて、それじゃあさっき会った魔竜について灯花と語ろうかな、と灯花に向き直る。
「で、だ。灯花」
切り出した瞬間。

ピンピロリーン♪　ポロリン♪　ピロリーン♪

『お風呂が沸きました。お風呂が沸きました』
解り易いチャイムと共に電子音声が鳴り響いた。
「えーと。お風呂の後でもいい？」
灯花は甘いものとお風呂が大好きな妹である。それを止めるなんて良き兄としては出来ようはずもない。
「ああ、ゆっくり浸かってくるといい」
魔竜についての話はその後にゆっくりでもいいか、なんて判断する。
「うん。……あ」
「どうした？」
何か思い立ったみたいに立ち上がって俺を見る灯花。
その頬がちょっとだけ赤くなっている。
「……えっちなことしちゃだめよ」
「しないしないっ」
「……はっきり言い切られるのも微妙だよ……」
「して欲しいのかよ」
「だめよ」
などと言って、小走りに風呂場に向かう灯花。

なるほど、これはつまり、年頃の乙女というヤツだ。
まあ、中学生にしては色々な所も育ってきたし、兄とはいえ男の視線というものが気になるのも無理はない。母さんの血筋はその体付きが素晴らしいっぽい。だから、俺としてはそんなこと言われると妙にドキッとしてしまうので止めて欲しい。
「はぁ……灯花のお風呂は大体三十分から一時間くらいだっけな」
それまではリビングでソファに寝転がって時間を潰すとしよう。
リビングにやってくると、母さんが奮発して買った五十インチの超薄型テレビの中で芸人たちがクリスマス番組で笑いを取っていた。俺はテーブルに置いてあったバトル漫画を手に取って、ソファに寝転がる。テレビの中では芸人たちが熱湯に入り、漫画の中では主人公が真の力に目覚めていた。
こういうのんびりした時間を有意義に過ごすのも大事なんだろう。
さっき会ったアーリたちだって、この街でそうやって過ごせばいい。
そうすれば争いごととか面倒なことは起きずにのびのび生きていけるのだから。
出来ればそのまま大人しくしていて欲しいものだ。

まったりした時を過ごしていると、気が付けば三十分はあっという間に過ぎていた。
そろそろ灯花は風呂から出てくるかな？　なんて考えるのは妹相手にちょっとどうかと

思うものの、あいつと話さなければいけない内容はシリアスめなのだから勘弁して欲しい。
むしろ湯上がりでほんのり上気している灯花は美少女さんなので、見ていると和むという癒し効果もある。だからそれを待ち望むことも別におかしいことではないのだ。
なんて自己弁護を完結させていたら、

ゴゥン!!

いきなり大きな縦揺れが発生した！
直後、マンション全体が『ミシミシッ』という嫌な音を立てると同時に

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ!!

轟音と共に横揺れが発生して、激しく部屋の中が揺れる。
これは……かなりでかいぞ！

「と、灯花！」
「に、兄さんっ」
お風呂場から困ったような焦ったような悲鳴交じりの声が聞こえる。
途端、いきなり目の前が真っ暗になった。
「きゃっ」
明かりという明かりが一気に消えて、視界が暗黒に包まれる。
停電だ。
大きな地震のせいでどこかの電線が切れたのかもしれない。
『美影開発都市』は地中に全ての電線が埋まっているから電信柱が倒れた、というのではないと思うが。どちらにせよ全ての電気が止まってしまったようだ。
「と、灯花、大丈夫か？」
部屋の形を記憶から呼び起こしながら、手探りでなんとか立ち上がる。今までいたソファの形からリビングの広さをイメージして、壁伝いに歩こうと手を伸ばした。
まだグラグラと少し揺れているせいで、足元がおぼつかない。
外の明かりも一斉に消えてしまっているようで、光は本当に何もないのだ。
そのせいか、中々暗闇に目が慣れない。
「くそっ、なんかちょっとでも明かりがあれば……」
手を伸ばして、壁に触れようとした。

その時。

ふよん。

「ひゃんっ!?」
まさかの柔らかさが手に触れた。
これはつまりアレだろ。うん。この柔らかさ、温かさ、何よりちょっとしっとり濡れているこの感触。
「に、兄さん……」
ぐす、とちょっと涙ぐんだような声！
「灯花。やっぱり意外と成長していたんだな」
「……兄さんのばか……」
弱々しい声に罪悪感が圧倒的に刺激された。そりゃあ、生の肌を兄に触られたら泣きそうにもなるだろう。むしろもう泣いているかもしれない。妹を守っているつもりが妹にひどいことをしてしまった兄になった瞬間だった。やばい、どうしよう、どうしたらいいんだ。土下座か？　でも真っ暗な中での土下座にどんな意味があるのだろう。誠意だろうか。責任とか。なんだ責任って。妹の生乳をうっかり触ってしまった際の責任の取り方なんか解らないぞ。おろおろ。

「くっ。もう結婚するしかないのか？」
俺の口をついて出た結論はそんなだった。
「……え？」
きょとん、と聞き直してきた雰囲気。
「ああ、いや、責任の取り方が何も浮かばなかったんだ」
「……うぅ……もう……ばか……真っ暗になって不安だから出てきたのに……」
なんか弱々しい声を聞いていると本当に罪悪感が刺激される。ダメだ。もうこれはダメだ。すまん灯花、ダメな兄を許してくれ。許さなくてもいいのでせめて少しくらいは今まで通り接してくれ。とほほ。
しかし、彼女でもない妹に対する責任はどう取ればいいんだろうなほんと。いや、妹を彼女にしたいという意味ではないが。
「とりあえず本当にすまん。ごめんなさい。なんでもします」
「謝罪の前に、手を離して……」
「あ」
やはり服越しではなく直接というのが、あまりにも気持ち良い手触りだったのもある。だがそれを理由にすれば灯花はきっと大泣きしてしまうだろう。ここはいい兄としてどうするのか――。
「すまん灯花。こんな暗闇の中でお前にいなくなられると怖い。灯花から触っててくれ」

手を離してからそんな言葉を告げると、ピクッと何かが揺れた気配がした。
「えっ……あ、う、うん」
躊躇いがちなそんな声が結構間近から聞こえてきて。
ぴと。
「そっか……それなら、うん。いいよ」
灯花の手がおずおずと俺の手をたぐって、きゅっと弱々しく服を摘んだ。
――なんとかなった……のか？
ここはなんとか切り抜けたと思い込むことにして、落ち着いて対応しよう。
「まずは俺のスマートフォンがテーブルにあるはずだから、それを探して……その明かりを使って、灯花は着替えとかした方がいいだろうな」
「うん……そうだね」
十二月の下旬。暖房も切れたこの状態では風邪を引いてしまうかもしれない。
俺は灯花の手を探って、きちんと繋ぐ。ピクッ、と再び灯花が震えた気がしたが、この際あんまり気にしないでおく。というより全裸のしっとり妹が間近にいる、とか気にしたら俺が大変になってしまうから意識から外すのだ。うむ。
そして足でようやくテーブルを探し当てて――もう片方の手でテーブルの上を探る。コップ、コースター、皿。きっとその隣辺りに……あった。
「よし、スマートフォンゲット。これで……」

「明かりを点けちゃダメだよ。泣くよ」
「あ、そうか」
今明かりが点いたら、そこに照らし出されるのは灯花のあられもない裸体なわけだ。
ちょっと。いや割と。むしろかなり見てみたいという衝動を必死で抑え込み、手にしたスマートフォンをその手に渡す。
「明かりは横のスイッチな」
「うん。兄さんは目を閉じててね」
「解った。すまん」
思わず謝ってしまいつつ、そのまま目を閉じる。
ペタペタと小走りに去っていく足音が聞こえて、カチャンとバスルームのドアが閉まる音も聞こえた。どうやら無事に戻れたようだ。俺は溜まっていた息を思い切り吐き出すと、ようやく冷静な思考が戻ってくるのを感じた。
……地震に停電か。母さんや姉さんが無事だといいけど。タワーの上でパーティなんて、思いっきり揺れたんじゃないだろうか。姉さんは高所恐怖症だから絶叫の末に気絶しているかもしれない。かわいそうに。
目を開いてみると、ようやく少しは目が慣れたのか辺りが見回せるくらいには回復していた。カーテンを開けて窓の外を見る。街は真っ暗闇だったが、綺麗な半月が浮かんでいて『綺麗だなー』とのんきに思った。

「――っ！　兄さん、魔竜の気配っ！」
ガチャッと勢いよくドアを開けて、灯花がバスルームから出てきた。
髪はまだ乾かしていないようだが、格好はさっきまでと同じ服になっている。流石にお風呂上がりに着る予定だったパジャマはやめといたようだ。
「魔竜の？　マジか。もしかしてさっきの地震も」
「そうかも。まっすぐに『ミカゲタワー』に向かっているみたい」
「くそっ、マジかっ！」
地震と停電だけでも充分に母さんと姉さんが心配だというのに。
更に魔竜まで向かっているなんてどんな罰ゲームだ。
「……行くしか、ないか……」
「うん。……髪、いっぱい拭いて来るね」
「そうだな。風邪引かないでくれよ」
「うん」
パタタ、とバスタオルを取りに行く灯花を見送り、俺は俺で自分の部屋へと向かう。もし魔竜がミカゲタワーに何かするつもりなら、それなりに準備する必要があるからだ。
「ったく。その魔竜がアーリだったら恨むからな！」
俺はまずタンスの中から目元を覆うミラーシェイドのゴーグルを用意すると、それを目に装着して、壁にかかっていたマフラーで口元をぐるぐる巻きにしたのだった。

人工的な明かりのほとんどが消えて暗闇に包まれた『美影開発都市』。
だが『ミカゲタワー』には緊急用電源でもあるのか、展望台がほんのりと青白く光っていた。おかげでタワー前の広場も不気味に青く照らされている。
そんな場所に、一人の人物がゆっくりと歩いてやってきた。
その姿形はまだ遠くて判別出来なかったが……灯花が感じている気配からしてあの人物が魔竜であることは確実だろう。
ふむ、一人か。
だったらなんとかなるかもしれない。先に仕掛けるという手もある。

◆　◆　◆

「出てきなさい、いるのは解(わか)っています」
よく通る、透き通った声は俺たちにそう語りかけてきた。声からして女性だろうか。見えるシルエットだけではどちらとも判断出来ない。

ともあれ、俺たちが先回りして物陰に隠れているのはとっくにバレていたようだ。
ぼんやりとしか照らされていないこの広場の、更に物陰に隠れている俺たち。その気配を鋭敏に悟ったということは、かなりの手練(てだ)れである可能性も出てきた。——仕方ない、正面からやるしかないか。
「行くぞ、灯花」
「うん。……優しく使ってね、兄さん」
灯花の潤んだ瞳(ひとみ)と目が合う。灯花の胸元、ちょうど胸の中心から上の部分が不可思議な形に——『紋章』のような形に輝いていた。
そこに右手を重ねると。
「んっ」
ちょっと愛らしい声が鼻からこぼれてドキッとしてしまう。
触れた場所が場所だけに、ふにっと僅(わず)かに柔らかさが感じられた。思わずさっき暗闇で触ってしまった時と同じ罪悪感に見舞われたが、なんとか心の奥にしまい込む。今は集中しなくてはいけない。
「聖剣解放——」
手をその輝きに触れさせて唱えた瞬間——莫大(ばくだい)な情報が頭の中に流れ込んできた。それは文字や言語というものよりも、もっと原初の情報形態。聖剣という存在がどのようなものので、どう扱うのか。その注意点などが、圧倒的な量の情報群として俺の中に浸透してい

く。それらを日本語に変換することは難しい。だけど使い手である俺には全ての『意味』が把握出来る。そういった代物だった。

その情報は紋章――『聖剣の刻印』に全て封じられている。それは聖剣である少女が、力を解放させる時にのみ浮かび上がる印だ。そして、その『聖剣の真名を知る』かつ『唱えることの出来る』俺だけが灯花の聖剣としての力を振るうことが出来る。

「来い、『咎人の王の魔剣』、レーヴァ・テイン！」

その真名を告げた瞬間、灯花の体が漆黒の炎に包まれる。それは人間の状態を『聖剣』の状態に移行する為のキーワードのようなものだ。

『聖剣の刻印』と『真名の詠唱』という二つの承認を経た瞬間――。

胸に触れている俺の手も、同時に燃え上がった。

だが、そこに灼熱の熱さは存在しない。

むしろ誰かが優しく抱き締めてくれているかのような温かさすら感じる。

「んっ……ぁ、あああっ！」

切なげな灯花の声と共にその体は輝き、やがて人の輪郭を失って――。

ボワッ！　とひときわ強い炎が立ち上がると。

俺の手には巨大な一本の『剣』が握られていた。

刃渡り約一・五メートル、全長一・八メートルある巨大な剣。ツヴァイハンダー、と呼ばれる大剣だ。

威風堂々とした漆黒と金色の装飾がなされており、刃は完全に黒一色。その剣の中心には揺らめく炎が描かれている。剣を握る俺の腕にもまた、黒炎が揺らめいていた。

――そう、これが『魔竜と対を成す存在』『世界の守護者』『魔竜を滅ぼす者』。

聖剣。

「この気配――かなり強い聖剣とお見受けします……！」

魔竜はこちらを見てかなり警戒しつつ、その声音には歓喜が含まれていた。

薄明かりに照らされたその姿は――男物の礼装を着た少女、という風情。中性的な整った顔、流れる漆黒の髪を結った頭。強い意志を感じさせる黒い瞳。アーリのように幻想的な美しさではないが、凛（りん）とした少女だった。

――やはりここは先制攻撃だろうか。歓喜して油断しているかもしれない今なら、その

まま仕留めることも――いや、却下だ。

相手の『能力』がまだ不確かだ。『魔竜』であるからには、それこそ人類を恐怖に陥れるような恐ろしい力を持っているはずなのだ。それがどんなものなのか、推測もしない内からこちらの手の内を明かすのは愚策だ。

『兄さん、どうするの？』

右手に握った剣から――いや、頭の中に灯花の声が響く。聖剣状態になった灯花とはこうやってコミュニケーションが取れるのだ。思考だけで会話出来るから相談は早いのだが、俺の考えていることも筒抜けになるので注意しなければならない。

『……相手がわざわざ待ってくれているんだ。真正面から打倒するとしよう』

頭の中で言葉を思い浮かべて返事すると、右手から熱い気配が伝わってきた。

概ね（おおむね）同意のようだ。

もう一度レーヴァの柄を強く握り、俺は物陰からゆっくりと姿を現す。

彼女はゴーグルとマフラーで顔を隠している俺を一瞬訝しがるように見たが、すぐさまその視線は俺の持つ大剣に移った。

「その漆黒の炎――『聖剣レーヴァ・テイン』ですか」

警戒色を強めながら話しかけてくる魔竜。

「そっちは魔竜だな」

俺は、なるべく厳かな声音になるようにトーンを低くして尋ねる。

すると、魔竜の彼女は丁寧な礼をしてきた。
「失礼しました。『六皇魔竜』が一人――『金の魔竜』こと、魔竜騎士ラスタバン＝エルタニアと申します。仲間からはラスティと呼ばれています」
詳しく知らないが、ラスタバンって男の名前だったような気がする。女にも名付けることもあるのかな？　と思ったが、騎士と名乗るくらいだから色々事情があるのかもしれない。こう、男として育てられた、とかベタ系の事情が。
「俺はレーヴァ・テインの聖剣士だ」
反してこっちの名乗りは端的だった。そもそも情報など多く与えないに限る。本当は会話すらしたくないのだ。何故なら、俺はこいつらのリーダーであるアーリに顔が割れてしまっている。騎士としては名乗りを上げての正々堂々とした決闘を願っているのかもしれないが、その点はこの見た目から察して欲しい。
目の周りを覆うミラーシェードのゴーグルを装着し、黒いマフラーを口元まで引き上げ、体付きを悟られないようにロングコートを羽織っている。正体を隠す気満々、というのが解り易いはず。
今の俺は不審人物と思われても仕方ないのは確かだ。反して、向こうは男装の少女。この様子を誰かが見ていたら俺が悪役に見えるのは間違いない。
「なるほど。自分をあまり見せたくない方なのですね」
察せられてしまった。もしかしたらこいつはいい人なのかもしれない。

「魔竜に恨まれたら困るからな。――私はこの街で平穏に暮らしていたいのだ」
『私って』
脳内で灯花がツッコミを入れてきた。俺は恥ずかしさもちょっと感じつつ、それでも芝居がかった言い回しを頑張った。
「人それぞれに思惑や戦い方はあるものです。その点については考慮しましょう」
やばい、物分かりがとてもいい。こいつは本当にいいヤツなのかもしれない。
見たところ、ラスティとやらは無防備に立っていた。こちらから仕掛けようと思えば全く問題ないように思える。今はまだ会話を楽しむつもりなのか、それとも……もうとっくに『能力』による何かをしている、という可能性だってある。
魔竜と聖剣の戦いはお互いの持つ能力を探ることが決着に繋がり易い。
これはいわゆる『能力ものバトル』系のお話ならよくある展開で、今の日本はそういう資料に事欠かないという情報大国だったりする。
「警戒をしているようですが、私の魔竜としての力はまだ使用していません」
そうなのか。そんなことを教えてくれるとは、余裕綽々のつもりなのか？
「正面から出てきて下さった貴方には不意打ちのようなことはしたくありませんので」
……不意打ちしなくて良かったー。内心で胸を撫で下ろす。
つまり、後はこいつときちんと正々堂々戦って、この街からお引取り願うだけだ。
よし！　それじゃあいっちょ頑張るかー！

と、覚悟も決めたところで……。

『っ！　兄さん、もうひとつの魔竜の気配が――！』

え？

「ラスティ～」

思いっきり聞き覚えのあるのんきな声が上から聞こえたと思った瞬間。

スタッ！　と制服のスカートを翻して俺とラスティの間に降り立った少女がいた。銀髪が非常灯の明かりに揺らめき、日中とは違った彩りを見せる。

「もう聖剣と会えたの」

「はい、アーリ様」

ラスティは恭しく片膝を立てて跪く。

『げげぇっ、アーリ！』

『……この気配、学校で感じた……』

そう、そこに立ったのは俺が学園まで道案内した、魔竜の姫君ことアーリだった。

「このように、無事に邂逅を果たしました」

「羨ましい。早速戦えるなんて」

アーリの服装が未だに制服だったりしているのを見る限り、もしかしたら迷って家に帰

れなかったのかもしれない。だから空を飛んでいた、とかで。しかしそんな彼女の事情は正直な話どうでもいい。

これはヤバい。

このままもしアーリに俺の正体がバレようものなら、平穏な生活は崩れ去ってしまう。

さっき思いっきり普通の人のフリをした以上、もしかしたら『よくも騙したわね！』とか怒らせるかもしれない！　これは――いきなり大ピンチだ……！

『兄さん、どうしたの』

『実はさっき、俺の正体を隠して普通の人のフリをして会ったんだ』

『……そうなの』

「うん？」

そしてアーリがこっちに気付いて近付いてきた。俺はゴーグルをきちんと整え、マフラーを鼻の上まで引き上げてから目を逸らす。露骨に怪しいかもしれないが仕方ない。

「……聖剣士？」

「そ、そうだ」

じろじろと見られるが、なるべく顔を正面から合わせないようにする。声のトーンもさっきよりも低くして、とにかく別人を装わなくては。

「どこかで会ったことない？」

「人違いだろう」

やばい鋭い！　このままでは、俺がさっきアーリを親切に道案内したカガリ君であることがバレてしまう。くそっ、こうなったら――！

「それよりどちらが私の相手をするのだ魔竜の姫君？　私はどちらでも構わないし、二人同時でも全く構わないのだぞ」

「へえ……」

アーリは感心したように目を瞬かせた。こうなったら俺の正体がバレる前にバトルムードにしてうやむやにするしかない！

「二人同時など、思い上がらないで下さい聖剣士！」

ラスティがいきり立つ。そう、それでいい。そういうノリでいけば話題が逸れる！

「うん。私は見物。ラスボスだから」

「ならば下がって見ているといい。お前の部下が倒される姿をな」

『兄さん三下の悪役みたい』

自分でもそう思っているだけに灯花からのツッコミには何も返せなかった。

だって、そうするしか、ないじゃないか……！

内心泣きたいくらいビクビクしているのを悟られないよう、なんとか虚勢を張って『凄腕の聖剣士だ』アピールに徹する。

「くっ、アーリ様、お任せ下さい！　私の『魔竜咆哮』は聖剣に後れをとることはありません。必ずやその聖剣士を倒します……！」

そしてラスティはすっかり乗ってくれた。やっぱり彼女は直情系のいい人なのかもしれない。世界のみんな、魔竜は意外と話が解る人たちのようだぞ。

「そう？　じゃあ見てるからがんば」

アーリはそんなラスティにあっさり頷くと、俺からゆっくりと遠ざかる。そして、広場の端っこの方まで行くと、植え込みの段差に腰掛けた。

そのぼんやりした座り方はいかにも無防備で、本当に『六皇魔竜』のリーダーなのか疑わしいほどに隙だらけだ。

とはいえ、二人同時に相手なんてしたくないのでこの流れにはホッとする。

後はバレないようにするだけだ。……バレませんように！

俺が向き直ると、ラスティはその整った顔に怒りを混ぜて俺を見つめていた。

「それでは始めましょう。実は、貴方は先制攻撃を仕掛けて来るかと思っていました。感じる視線が殺気を帯びたものでしたので」

正直それも考えていただけに否定はしない。それにこの言葉から解ることもある。

「その堂々とした騎士としての態度。対応や守りに自信があるのだろう？」

俺は、こいつは不意打ちや闇討ちに対応出来る力を持った魔竜なのだと推測していた。

だからこそ、自信満々に『先制攻撃を仕掛けて来なかったのは正解だ』と取れるような言葉を敵である俺に告げたのである。まあ、うん。その余裕というか真っ直ぐさは――悪いけど利用させて貰おう。

「お見事です。ではそのSクラスの聖剣、『レーヴァ・テイン』の実力と共に、貴方の力を見せて頂きましょう、聖剣士！」

ラスティが手を前方にかざすと、その手のひらに『魔竜の刻印』が浮かんでいた。

『聖剣の刻印』と対を成すように描かれている、竜をイメージさせるような紋様。それが強く輝いた瞬間、金色の光が大地より放たれる。

その光に照らされるかのように、ラスティの背後には巨大なシルエットが見えていた。

大きな長い長い蛇のようなシルエット……おそらく、アレがラスティの魔竜としての力のイメージ。『金の光に照らされた竜』か……。

『覚えはある？』

『いや、ない。だが大体の推測は出来ているから安心しろ、灯花』

『……うん。最初から安心してるし信頼してるよ、兄さん』

灯花の心強い言葉を得て、俺の心は凪いだ海のように穏やかだった。焦りも恐怖も確かに感じている。だけど、それらを自制出来るほどに自分と灯花を信じていた。

「さあ、来なさい聖剣士！」

ラスティの声。まずは相手の力量を測るつもりで先手を譲る——もしくはカウンター能力を持っている、のどちらかだろう。つまり彼女は『防御』に特化した力を持っていると推測する。『六皇魔竜』の先鋒として現れたからには、彼女に挑みかかってくる聖剣たちの実力を見るという役目もあるのかもしれない。

アーリをチラッと見れば、興味津々といった様子で俺たちを見つめていた。

先に手の内を見せるのは少しだけ躊躇われたが——例えばそれが。

相手の推測を遥かに凌駕するほどの力だとしたらどうだろう。

『よし、準備はいいか灯花』

『うん。兄さん、レーヴァ・テインの黒炎を使えるのは三回だけだから気をつけてね』

『解ってる。心配はしなくていいさ』

『……うん』

この『レーヴァ・テイン』は確かに強力な聖剣だ。その剣から発せられる荒れ狂う炎は、神々の世界を焼き尽くしたと言われるほど。つまり『この黒炎で焼けないものはこの世界にはない』という逸話を持つ伝説の剣だった。しかしその炎を使う回数は限られている。北欧神話にある世界層は三つ。つまり、三回その炎をいかなる方法でも解き放てば、神々すら滅ぼしてしまった破滅が訪れるかもしれないのだ。だから、レーヴァ・テインの力を使うのは三回まで。そう、俺は『聖剣の刻印』から知識を得ている。

灯花の聖剣は、そんな恐ろしい力を持った諸刃の刃だった。まあ、逆に言えば三回は凄い炎が使えるわけだ。そう割り切れば戦い方なんてものも見えてくるわけで。

「行くぞ、魔竜！」

俺は剣の柄を両手で持つと、大きく縦に振りかぶった。俺の手に渦巻いていた黒い炎がその剣を螺旋状に駆け巡る。

剣から放たれる黒い炎が更に広がりを見せ、俺の周囲に黒い火の粉を大量に散らし。
最高潮まで高まった黒い力を、俺はその『真名』の詠唱と共に解き放つ!!

「『九世終炎剣』――!!」

剣を振り下ろした瞬間、黒い炎は衝撃となって一直線にラスティへと突き進んだ。

「っ、これがレーヴァ・テインの力……!?」

バジィィィィ!!

黒い炎の塊がラスティの右手に当たった瞬間、金色の光と黒い炎が衝突して激しいスパークを発生させる。だが、それも一瞬のことで……黒い炎はラスティのいる周囲の空間を燃やし、彼女自身の体をも燃やし始めた。『真名』の詠唱を伴った力の発動は、聖剣の力に方向性を与える。つまり、その名を口にすることで神話を再現出来るほどの力を放つことが出来るのだ。
今、ラスティは別名『神々の黄昏』と呼ばれる、世界を終末に導くほどの『神話』をその身に受けていることになる。

「このままでは抑え切れません――!!」

そりゃあ、俺としては出し惜しみなく最大の技を放ったのだ。いきなり全身全霊を込めた力で来るとは流石に思っていなかったのか、ラスティの防御の力は見れば解るほどに押されていた。

「我が魔竜よ咆えろ――『金色の牙竜ラドン』!!」

ラスティがその『名』を呼んだ瞬間、その姿が金色の眩い光に包まれた。衣服が黒と金色を基調とした戦闘装束に変化する。そして彼女の右手に宿っている刻印が更に強く輝くと、その『刻印と同じ文字』が大量に地面に走り――不思議な形状の『陣』を描き出す。
それはやたらと広い円形の魔法陣だった。地面いっぱいに流れる刻印たちが、踊るように回転する。めまぐるしいほどの情報量。そこから金色の体軀を誇るように、輝く表皮を惜しげもなく披露する『竜』が召喚される。

「『百竜裂牙』!!」

『――――――!!』

金色の魔竜は、牙が無数に並んだ口を大きく広げ、高らかに声無き声で咆える!
それは人の耳では聞き取ることの出来ない、魔竜のみが語る言語の叫びだった。

その咆哮と同時に――魔法陣から、人の大きさの三倍はある無数の鋭利な刃が次々に生み出されていく。その刃は金色の『竜』を象ったもので。まるで今――ラスティの背後に現れた『金色の竜』の分身のようだった。

『あれが、あの魔竜『ラドン』の『魔竜咆哮』なのかな？』

『ああ、来るぞ灯花！』

およそ百にも及ぶ、巨大な金色の刃。攻防一体に使えるその無数の力こそが、ラスティの持つ『魔竜咆哮』なのだろう。

そしてそれら無数の竜刃は一斉に――俺の黒炎へと放たれる。

瞬間、激しい衝撃が辺りに走った。

「っぐ!?」

あまりの力の炸裂に、ビリビリと地面や空気が震えた。

その衝撃は爆風となって広がり――。

俺のマフラーとゴーグルが風でずれそうになる！

「あわわわわっ！」

思わず片手を剣から離して、慌てて顔を覆う！

「ん？」

そんな衝撃の渦の中でも平然としたアーリが、こっちに注目した。いかん、俺の正体がバレないように、なんかそれっぽいことをして誤魔化すしかない！

「せあっ！」

俺はレーヴァを思い切り地面に突き立てると、その柄を握る力を強めた。

「『黒炎匣』！」

その技の『真名』を唱えた瞬間、俺の目の前に漆黒の炎が奔流となって、壁のように立ちはだかる！　この技は衝撃波だろうが何だろうが、俺の前から来るものをなんでも焼き尽くすという攻防一体の炎だ。

相手が不用意に近付いて来た時などに便利なのだが、今は……。

『今のうちに直さねばっ！』

自分の正体を隠す為の目眩ましとして使う！　すぐさまゴーグルを直し、マフラーを強くぎゅうぎゅうに巻き直す。

『今、それを使わなくても耐えられたよね？』

『き、緊急事態だったんだ』

『……私の力は三回しか使えないのに……』

『正直すまんっ』

灯花の抗議にはもう謝り倒すしかないが、これもまたある意味致命的なのだから許して欲しい。兄さんはどうしてもアーリに正体がバレるわけにはいかないのだ。

「なんか聞いたことがある声だったような……」

アーリの呟きが聞こえて、どっと冷や汗が出る。

このままでは――思い出されてしまう!!

『あいつの『魔竜咆哮』は解ったし、その魔竜本体っぽいのも現れたのだから、さっさと倒しておうちに帰るとしよう！』

『兄さんがこんなに焦るなんて珍しいね』

いやあ、結構灯花には焦らされているぞ、なんて頭の片隅で思いつつ。あんまり具体的に思い出すと灯花が恥ずかしがってしまうので自制した。

さておき、今の俺はもう焦りに焦って、この場から退散することしか考えていない。

通常、焦りは油断を生むから戦場においては禁物とされるのだが、俺はその焦りをきちんとコントロールして『相手がどんなものであれ最短でやっつける方法』というのを編み出す方向に転化した。そして集中して……まるで締め切り前の母さんのように、作家のような恐ろしいまでの集中力を自分に描き出して、すぐにその方法を編み出す！

「あの技は……私の『百竜裂牙』の攻撃を黒き炎の力による障壁で――」

なんかラスティが俺の技について語ってくれているが、そんなものは待ってやる暇がない。とにかく、一刻も早く、アーリが俺の声を思い出さないうちにやるしかないのだ！

「うおおおっ！」

自分の前に壁として立ちはだかっている黒炎の壁に、俺はダッシュで飛び込み、一気に

突き抜けるように走った。
「え？」
目指すのは、魔竜ラドン。目標に向けて一心不乱に走る。
「ぼ、防御の技を突き抜けて……？　くっ！」
まさか自ら放った黒炎のガードを自分から突破して出てくるなんて思っていなかったのだろう。ラスティは一瞬だけ驚いたような顔を浮かべてから、慌てて右手を俺に向けようとする。だが、その『一瞬の隙』があれば俺には充分だった。
「うおおおお、せーの……!!」
俺は走りながら全力で剣を振りかぶり。
『えっ!?』
灯花の抗議の悲鳴が一瞬聞こえた頃には、俺は全力でその剣を投げつけていた。
「なっ!?　自らの聖剣を!?」
驚くラスティ。
再び咆哮を放とうと大きく口を開いていたラドン。
その大口の中に向けて、一直線に。
漆黒の炎を彗星の尾のように引きながら聖剣が突き進む。
「『九世終炎剣』――!!」

その剣が口の中に入ったその瞬間、俺は技の『真名』を叫んでいた。

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

ラドンの内側で物凄い黒炎の大爆発が発生し、その身を『黒』で燃やす!!
「あ、あああああっ!?」
同時にラスティの体からも黒い炎が上がり。
バシュウウウ!!
ラドンの金色の巨体が青白い光の粒子となって飛び散った。いかにも大ボスっぽい消滅の仕方に、ホッと胸を撫で下ろす。
「……わ、私のラドンが、こうも、容易く……」
三回しか使えないレーヴァ・テインの力をふんだんに使ったことなんてまるで気付いていないのだろう。ラスティは呆然と言葉をこぼすと、胸元を押さえて力なく膝をついた。

その胸元からも、ラドンと同じ青白い粒子が溢(あふ)れるように落ち続けている。
魔竜の持つ『能力』。その顕現とも言えるドラゴン体が倒された今、彼女にはもう戦う力は残っていないはずだ。
後はこの本体である少女をやっつければ魔竜と聖剣の戦いはおしまいなのだが。
「……（じー）」
アーリがもの凄(すご)くこちらを見ている！
あの無表情な顔は『よくも私の部下を』というよりは……俺には『やっぱり知っている人の声だったような……？』と疑っている時の顔に見えた。
よし。帰ろう。今すぐ帰ろう。疾(と)く帰ろう。
俺はラドンがいた辺りに落ちているレーヴァ・テインをさっさと拾うと、くるりとアーリやラスティに背を向けて歩き始める。
『兄さん……』
灯花の抗議めいた声が頭に響くが、今は脇目(わきめ)もふらずにここから逃げ去りたい。
「ま、待って下さい！　どうして、この私に生き恥を晒(さら)させるのですか、聖剣士――!!
倒したならば、後の遺恨を払拭(ふつしょく)する為にも、この命を奪うべきでしょう！」
早く逃げたい俺の背中に、そんなラスティの悲痛な声がかかったので。
「誰(だれ)が殺すか!?　俺らは普通の暮らしがしたいんだっつーの！」
うっかり素で返事をしてしまった。

「おや？……やっぱり今の声……」
アーリがスタスタと近付いてくる！　まずい!!
「さ、さらばだ魔竜たちよ！　まだこの街で悪さをするならば、次こそ容赦はせんぞ、ワッハッハッー！」
半ばやけくそ気味に低い声で笑いながら。
俺は猛烈なダッシュでその場から逃げ出した。
『兄さん……優しく使ってくれなかったね……』
そんな抗議の声が頭の中に響いて、再び胸が苦しくなる。
『すまん、次は多分投げたりしない』
『……兄さんのばか』
灯花の非難の声に胸元を強く押さえながら走った。
やがて街の明かりがポツポツと回復していく。
「なんと懐が深い――完敗です、聖剣士……」
そんな声が後ろから聞こえてきたものの、もうツッコミを入れている暇などない。まだアーリの視線は強く背中に感じるし。
ともあれ、こうして。

俺はこの街を襲った最初の『六皇魔竜（ゼクスドラグナー）』を、クリスマスの夜に倒したのだった。

◆幕間――魔竜姫　其の一――

猛ダッシュで去っていく聖剣士の背中を眺めながら、さっきの声は同い年くらいの人かな、なんて考えていた。声質は低くてなんとなく強そうな感じだったし。ラスティをこんなにもあっさりと倒してしまうなんて、本当に凄い。

「あれがレーヴァ・テイン」

もう彼の姿は見えないけれど、私は暫（しばら）くそちらの方向を眺めていた。

「はふ……落ち着いて参りました」

膝をついていたラスティの息がようやく落ち着く。もうダメージから回復したのだろうか。自分の中にいる魔竜を直接攻撃されたのだから、暫くは立てないと思ったのに。

「大丈夫なの」

「はい。どうやら手加減をされていたようです。先ほど受けたラドン口内での爆発は、最初の力よりも更に抑えられたものでした」

「ラスティに手加減……」

確かに、立ち方や戦い方はどこか手慣れた雰囲気を感じた。熟練度が高いというよりは、あらゆる状況を想定して、落ち着いて対処していたかのような。玄人っぽさや達人っぽさとは違う、もっと鋭い若さみたいな。そんな印象だ。

「先鋒であったのにいきなりの敗北、大変申し訳ありません、アーリ様」
「ううん。いきなりの大物との戦闘、そして無事に生きての帰還。よく出来ました」
私がその肩に手を置くと、ラスティは目を潤ませて大きく頷く。
「もったいないお言葉です」
魔竜騎士ラスタバン＝エルタニア。私が付けた愛称がラスティ。
私が魔竜姫になる前からのお供で、お友達だったひとつ年上の少女。
今は彼女が無事だったことが何よりも嬉しい。
「さて、アーリ様。この街には強い聖剣士がいることが判明したわけですが」
「うん」
「この後はいかがなさいますか？」
この後。
一応、ラスティが一番手で、二番手は別の魔竜……みたいな予定はある。
だけど、ラスティがいきなり負けてしまうというのは予定外なので、また仲間に相談しなければいけない。
「とりあえず……」
私はラスティの額に張り付いている髪を指先で横によけてあげつつ。あのレーヴァ・テインの黒炎はラスティの体を傷つけていないことに内心でホッとした。
「私たちが寝る家に向かおう」

「もしかして着替えていなかったのは、新居に辿り着けなかったからなのですか」
「そんなことはない。学校で手続きをした後に散歩していただけ」
「ふふっ、そういうことにしておきますね」
その見透かしたような笑みが気になるけれど、寛大な心で許すことにしつつ。
「……レーヴァ・テインの聖剣士……」
もう一度彼が立ち去った方を見つめる。
どうしてかは解らないけれど。
なんとなくだけど。

近いうちに、すぐ会えるような――そんな予感がしていた。

第二話『聖剣解放』

The World of Sword and Dragon

ピンポーン。

そのチャイムが鳴ったのは朝七時くらいだった。

「はーい」

丁度家を出ようと思っていた俺が玄関に向かう。

ガチャ、となんの警戒もせずに開けたそこには――。

「おはようございます。お隣に越してきたラスタバン＝エルタニアです」

昨晩俺が倒した魔竜がとても丁寧にお辞儀していた。

背中に氷を突っ込まれたかのような悪寒が走る。

――早速バレたのか？　どういうことだ？　どうやって俺の家を調べあげた？

しかも彼女が着ているのは『都市立美影中央学園』の制服――。

「あの……？」

ラスティはドアを開けたまま硬直している俺を見て小さく首を傾げていた。

あの時の俺は顔を隠していたはず。だが、髪型はそのままだったし、声までは誤魔化し切れていなかったのかもしれない。だが、いくらなんでも情報を掴むのが早過ぎる。俺に発信機でも付けていたのか、それともこいつらの仲間の一人がそういった諜報活動に特化しているのだろうか？　くそ、油断していた……！

全身を襲う寒気。喉の奥に苦いものが感じられ、つぅと汗が頬を伝って落ちる。

「あ、なるほど。そうでした」

そして何かに納得したかのようにラスティは頷くと、手にしていた学校鞄から何かを取り出そうとする。武器か何かだろうか。それにしてはフランクに出し過ぎだが。もしもここで戦闘になった場合……家の中にはまだ母さんがいる。灯花は制服に着替え終わっただろうか？　先に出た姉さんはもう学校に着いただろうか？

どう考えても状況が不利過ぎる。なんとか打破するには先制攻撃しかない。だが、肝心の相棒である灯花がすぐそばにいないというのは致命的だ。

ラスティは鞄の中にあったものを掴むと、ゆっくりと差し出して……。

「すみません、こちらが『引越し蕎麦』になります。日本の文化では茹でて持ってくるべきだったのか、それともこのままがいいのかよく解らなかったので、袋のまま持って来ま

した。良ければ年越しの際になど食べて下さい」
やんわりと照れたように微笑まれてしまった。
「ひ、引越し蕎麦？」
「はい。先に差し出すもの、なのですよね？」
「い、いや、挨拶の後でもいいと思うし、別にそんなすぐに出す必要もない、はず」
「あ、そうなのですね。良かった……日本は礼儀に対する美意識が高いと聞いていましたので、そそうをしてしまったのかと思いました……ほっ」
胸に手を当てて心底安心している姿を見ていると普通の礼儀正しい少女に見える。
彼女が昨晩の地震と停電の原因だ、と誰かに教えたところで信じて貰えそうもないくらい、可憐な仕草だった。実際俺も『同姓同名の別人説』を一瞬考えたくらいだ。
「あー、いや。礼儀正しく出来ていると思うよ、うん」
「そうであれば嬉しいです」
どうやら、俺が『レーヴァ・テインの聖剣士』であることは全くバレていないらしい。もしバレているのだとしたらかなりの策士だろう。一応その可能性を頭の片隅に置きつつ、俺は『初対面の隣の人』として接するようすぐに切り替える。
「兄さんどうかしたの？」
着替え終えた灯花が玄関までやってくる。そして俺が話している相手を見て小さく息を飲んだ。まあ無理もない。だがその不自然な態度で何か気付かれたりしたら大変だ。慌て

て先にフォローする。
「あ、ああ、こちらは、お隣に引っ越してきたラスタバンさんらしい」
「……そうなの？」
灯花よ、明らかに警戒した目で見たらこっちが聖剣と聖剣士であることがバレてしまうかもしれないぞ。バレていなかったとしても相手は魔竜なんだからいきなり「ムカつきました♪」とか言いながらドカーン！　としてくるかもしれないじゃないか。ここは穏やかにやり過ごすべきだぞっ。
という内心の焦りをなんとかブロックサインで伝えようと思い、手を上下に振って落ち着け落ち着け、と告げてみた。だが灯花はさっぱり解らない、という顔で首を傾げる。
「初めまして、ラスタバン＝エルタニアです。親しい者からは『ラスティ』と呼ばれていますので、良ければそうお呼び下さい」
丁寧にお辞儀をする彼女に合わせて、灯花も不思議そうな表情を浮かべて頭を下げる。
「月夜野、灯花です。……宜しくお願いします」
しかし、ラスティも俺たちと同じ学校か――何年生なのかは解らないが。とても礼儀正しくていい人っぽい。それなのに俺は昨日、あんな大人気ない倒し方をしてしまった。
……なんかこう、また胸が苦しくなってくる。魔竜との遭遇は常に俺の心臓を酷使するもののようだ。出来れば今後は……せめて年越しまでは平穏に過ごしたいなあ。
「あれ、カガリ」

その声を聞いた瞬間、俺の心臓は一気に跳ね上がった。
俺の中で『今一番聞きたくない声コンテスト最優秀賞受賞者』の声が俺を呼んだのだ。
ギギギ、と動きたがらない首をなんとか向けてそちらを見てみたら、隣の部屋のドアから制服姿のアーリが出てきたところだった。
「ビックリ。隣はカガリの家だったの」
バックンバックン高鳴る胸をなんとか抑えながら尋ねることにする。
「なあ、アーリ。これは偶然なんだよな？」
「うん。とても偶然。運命的な」
「運命的とかは別に要らないから」
「そう？　女の子は割とみんな『運命』とか好きだったりする」
そういうものなのか？　と二人を見てみると。俺たちが知り合いっぽいことに関して窺うような視線とかち合った。一方、完全に無表情なままなのがアーリで、こいつはなんというか嘘を吐いたり駆け引きをしたりするタイプではないように思える。俺がそう信じたいだけかもしれないが、少なくともそんな相手の正体を探るような駆け引きをここで俺相手にしているとは思いたくない。
「アーリ様、この方と知り合いなのですか？」「兄さん、この人と知り合いなの？」
お互いの相方がそれぞれ同時に尋ねた。そういえば昨晩はへとへとになってしまったせいで結局灯花にアーリについては詳しくちゃんと説明してなかったっけな。しかし、なん

かこういうタイミングで説明しないといけないというのは、とても気まずい。
昨日突然降ってきたから学校まで案内したんだ、とか説明すればいいんだろうか。
それは信ぴょう性が薄いが『魔竜姫』ならそれもありか？　なんて考えていた時。
「カガリは私の初めての男性」
『――っ!?』
アーリの言葉に二人の少女が同時に息を呑んだ。
「何言ってんだお前!?」
思わず声が裏返る俺。芸人のような上げ下げのイントネーションでツッコミを入れる。
「ア、アーリ様！　わわわ、我らが『六皇魔竜』の長たる者が、そそそんな軽はずみなことをっ！　そ、それに、は、初めてって、そんな、え、それって、あの、ええと!?」
色々焦り過ぎでちゃんと喋れていないラスティ。
「兄さん……どういうことなの……？」
一方、地の底から響いているんじゃないかってくらい低い声で尋ねてくる灯花。
ちょっと……いや、かなり怖い。
「二人ともあっさり信じてんじゃねえよ!?　どこの世界の俺が魔竜のお姫様をいきなり手籠めにするような勇気と甲斐性を持ち合わせてんだ！」
「うん。ちょっとアダルティーな冗談」
この女が真顔のままそんなお茶目をかましてくれたせいで、俺の寿命は今だけで半分く

らい持って行かれた。本気で心臓に悪いなアーリは……。
「キスくらいしかしていない」
「してねえだろ!?」
ついつい言葉荒く叫んでしまい、朝からご近所さんに申し訳ない気分だった。こっちはただでさえ正体がバレたかバレてないか気が気でないのに、こんな無表情ボケにまできちんと付き合ったりなど出来ないのだ。
「兄さん、したの？　キス……」
「してないって言ってるだろっ！　してたらもっと気まずい顔してるっての!!」
「ア、アーリ様、その、キスは我々魔竜にとって『契約』の意味を持つもので……」
ラスティがおろおろしている姿は、昨晩やさっきまでの『ぴしっ』とした雰囲気から全く想像出来ないものだった。すっかり動揺した顔で視線が泳いでおり、これが昨日の魔竜かと思うとビックリしっぱなしである。
「実は、小粋（こいき）な冗談。日本のＪＫっぽいトークを目指した」
「その冗談のせいで俺の寿命が死ぬほど減ったよ……」
おのれ日本のＪＫめ。アーリが変な知識を覚えたじゃないかちくしょう。
ちなみに女子（Ｊ）高生（Ｋ）という意味だった気がする。
「なるほど。こういう『恐怖』のさせ方もあるの」
「もっと実力で怖がらせてくれ魔竜の姫らしく」

「そう?……解った、そうする」
どこまでが冗談で、どこまでが本気なのか、さっぱり解らない。
このほとんど瞬（まばた）きくらいしかしない無表情は本当に厄介だ。
「ホッ、冗談でしたか……全くもう、アーリ様は……」
「冗談ならいいけれど」
胸に手を当てて安心するラスティ。だが灯花はまだ疑いの目を向けてきていた。なんだか信用されていない気がする。とほほ。
「カガリくーん、灯花ちゃーん。お客さんとの会話が家の中まで聞こえてるわよー」
ずっと玄関で会話してたからか、母さんがキッチンの方から顔を覗（のぞ）かせた。
しまった。今の魔竜とか話していた内容も全部聞こえまくっていたのか。
だが、いわゆる普通の一般人である母さんは、きっと常識的な判断をしてくれるはず。
『魔竜なんてさっさと家の前から追い出して！』とか言ってくれるに違いない。
先日恐ろしい宣言をしたテロリストを煽（あお）るような言葉は本来ならば大変危険なのだが、アーリは一般人には手を出さないと言っていた。あの言葉は信用していい気がしている。人々に忌避されるような言葉を投げかけられることくらい既に織り込み済みだろう。
さあ、頼むぜ母さん……！
「玄関じゃ寒いでしょ。魔竜さんたちにもちょっとだけ上がって貰いなさい」
「のんき過ぎるだろ母さん!?」

「おじゃまします」「失礼いたします」
「お前らも当たり前のように入ってくんなよ!?」
「兄さん、朝から叫び過ぎでうるさいよ……」
「うぐっ」
何故(なぜ)か悪いのは俺になっていた。
「アーリ様、日本ではきちんと玄関で靴を脱いで上がって下さいね」
「うん、心得ている。学校では上履きに履き替える、というのも覚えている」
「結構です。では上がらせていただきましょう」
ラスティは俺に丁寧な一礼をするとそのままアーリを連れてリビングに向かう。
「……どういうことなの？　どうして魔竜が隣に引っ越してきたの？」
灯花が上目遣いで尋ねてくるが。
「俺が聞きたいよ……」
俺としてはこれが遠まわしな嫌がらせではないことを祈るばかりだった。

◆　◆　◆

「というわけで、隣に引っ越してきたラスタバン＝エルタニアと、こちらが私たち『六皇魔竜(ドラグナー)』の長であるアーリアン＝D＝ハクアです。以後お見知りおきを」
「よろしく。アーリでいい」
みんなでリビングのソファに座って挨拶が始まっていた。
「あらあらご丁寧にありがとうございますね。月夜野加々美(かがみ)です。こっちのしかめっつらが息子のカガリで、その隣が娘の灯花(ともか)です。もう一人、長女の日和(ひより)がいるんですけど、もう学校に向かってしまっていて」
「カガリさんに灯花さんですね、改めて宜しくお願いします」
「あ、ああ」「よろしくね」
俺と灯花が返事をするとラスティは僅(わず)かに微笑んで頷(うなず)いてくれた。
内容はともあれ、なんとも和やかな自己紹介だ。

――こんにちは、息子のカガリです。
妹が聖剣で、俺は聖剣士やってます。
今後はなるべく宜しくしない方向でお願いします。

内心そんな自己紹介をしつつ。とにかく居心地が悪くて仕方ない。どこかに逃避先でもないだろうかとリビングを見回し、つけっぱなしになっているテレビを見た。

『皆さん、先日全世界にテロ予告のありました『六皇魔竜』の一人が、昨晩ここで倒されたそうです！』

画面の中では、リポーターが見覚えのあるタワーを背景にしてシリアスに叫んでいた。

「おお。もう報道されている」

アーリは母の対応をラスティに任せて、テレビの方を見る。

『皆さんの記憶にもまだ新しいと思いますが――。アーリアンが犯行声明を出した『美影開発都市』で、彼女の仲間の一人『金の魔竜』が倒されたそうです。この情報は、今朝我々のテレビ局に連絡が入ったものです』

ラスティの敗北を誰かがわざわざマスコミに知らせたらしい。

あの戦いをどこからか把握していたってことか？　まあ魔竜と聖剣のバトルなんてこの街にいる以上気になって仕方ないだろうが……。それをわざわざ報道機関に教えるなんて、どういう意図があってのことだろう？　そして、そんなヤツがいるというのをアーリはどう考えているのだろう？

自分の仲間が負けたことを大々的に報道されているのだ。しかもこれはおそらく全国ネットだろう。いずれは世界的に広がるかもしれない。しかも、画面には自分の顔写真がテロップと共に出ている状態で、である。

「私の顔写真、流れている時間長い」

「写真写りいいのね、アーリちゃん」

「そう？」

母さんの言葉に、ほんのり頬が染まるアーリ。その態度だけ見ている分には、単純に外国から来た少女が隣に引っ越してきただけに見えなくもない。だが今そこにある顔が、テレビの中では『凶悪な世界的テロの首謀者』として映っているのを見ているととても残念な気分になる。

「これだけいっぱいテレビに流れれば、この街の聖剣たちも魔竜たちも、私たちに接触しにきてくれるはず」

「アーリちゃんは有名になりたいの？」

母さんは本当にのんきに尋ねていた。つい一昨日の夜はテレビでの宣言を見て大慌てだったというのに。当人が無害そうな少女だから安心したのだろうか。

「うん。その方がいっぱい会えるから」

「なるほど、有名になって出会いを求めているのね」

元々どこか天然っぽい母親だったが、それにしても警戒心なさ過ぎだろ。昨日はそこの大人しく座ってるラスティにタワーごと狙われたんだぞ。

だけど、よく考えたらアーリたちは一般人は殺さないように気を遣っているはず。だったらもしかして、昨日も母さんと姉さんは大丈夫だったのか？　何故タワーを狙ったのか、せっかくだから後でラスティに確認してみるとしようかな。

「出会った聖剣をやっつけて、喧嘩を売ってくる魔竜もいたらけちょんけちょんにして、

その後は世界的に恐怖して貰うつもり」

アーリの主義主張はこないだから全くぶれていない。あくまで自分が魔竜として恐れられる為にこの街にやってきたのだ。だから魔竜に対抗出来る聖剣にも会いたいし、他の魔竜とも会いたがっている。

しかし、すぐここにその聖剣と聖剣士がいるというのに、魔竜たちは全く気付いていない。灯花は魔竜がちょっと力を使うだけですぐ把握出来たりするのに。おかげでこうやってバレずに過ごせているので助かるが。

「それにしてもちゃんと特集組んで貰えて良かった。なんの特集もされなかったり、アニメの上の部分でピロリーンって速報で出されるだけだったらどうしようかと」

「なんだ、アーリは……えーと……『金の魔竜』とやらが負けたことが世の中に広まって欲しいみたいだな」

「うん。だってラスティが負けたのをテレビ局に電話で教えたのは私」

「お前自らかよ。ってかラスタバンさんなのか」

情報提供者はまさかの本人の上司だった。

「あの、カガリさんもラスティとお呼び下さい。ラスタバンは男性名ですので、我が名前ながら少し恥ずかしいものがあります」

「お、おう、解った。……じゃあラスティさん」

「はい」

「負けたことを全国放送で流されてもいいのか？」

この礼儀正しい騎士っぽい少女にしてみると大変な恥辱ではないだろうか。世が世なら『死んでお詫びを！』とかしかねないタイプに見えるし。

「昨晩の戦い、私は本当に完敗でした。余裕の態度、堂々たる仕草、そして意表を突いた戦術。更に私を生かして去る懐の深さ。そんな圧倒的な力量差のせいで、私のプライドは綺麗に崩されてしまったのです。恥じるのは敗北ではなく、自分の未熟さです」

とてもすっきりした顔で言われてしまう。内心はかなりいっぱいいっぱいだったのだが、それはまるでバレていなかったようだ。むしろ褒められ過ぎだったので気恥ずかしい。

「そっか。まあ、死なないで良かったな」

「はい」

ラスティは静かに微笑んで頷いた。うん、このままただの知り合いとして接していくならばラスティは平和でありがたい。アーリみたいなボケもしないし。

「それにアーリ様も、せっかくだから青春を謳歌すればいいと仰って下さいました」

「日本の治安は最高。だからラスティものんびり学園生活を満喫するといい」

「その治安を思いっきり乱そうとしているアーリが言うなよ」

「治安は極力守る。私が相手したいのは、今は聖剣たちだし」

「お前って自分のこと『ラスボス』とか言ってなかったっけ」

「その通り。なので、挑まれない限りは見守るつもり」

「……挑まれたらやっつけるのか？」
「それはもう。コテンパン」
コテンパンか。言い回しが古いのは日本語にあまり慣れていないからだろうな。
しかし……だとすれば俺はアーリと戦わないで済むってことか？　少なくとも俺からこいつに手出しするつもりなんてさらさらないわけだし。ラスボスって言うくらいなんだから『六皇魔竜（ゼクスドラクナー）』の誰かを残しておけば戦わないってことになる。
「でも『レーヴァ・テイン』の聖剣士は別。ちょっと味見したい」
まさかの例外発言だった。その味見がいやらしい意味だったら『是非頼む』と言いたいところだが、残念ながらこれは確実にバトルとかの方面だ。
「な、なんでまた」
「……なんでだろう」
テレビに向けていた視線が、くるっと俺に向けられる。
そして、じー……と音がしそうなほど。その透明感のある瞳（ひとみ）が俺を見つめた。
「多分、昨日の戦いがあっさり過ぎたから」
「そ、そうなのか」
「うん。彼はなんとなくカガリに似てた」
ギクリッ。
それはもう心臓が一瞬止まったんじゃないかってくらい鼓動が跳ねた。

ここで『俺がそんなこと出来るわけないだろ』とか『人違いも甚だしいぜ』とかの嘘（うそ）を吐（つ）いてしまうと……後々いつかボロが出て泥沼になりそうだ。だから敢（あ）えて俺は……。
「な、何がだ？　イケメンだったのか？」
「それはない」
きっぱり言われてしまうと流石（さすが）に多少凹（へこ）む。
「顔は見えなかったし。でも、なんとなく雰囲気が、それっぽかった」
「そ、そうか。まあ、うん。俺に似てるから特別視なのは、嬉（うれ）しいよ、うん」
「うん。なので彼を絶対に探し当てるつもり」
絶対に、という言葉に冷や汗が流れた。昨日の帰り道はとても遠回りしたり、物陰に隠れたりと、やたら警戒したので追われていないはずだが。今後は本当に気をつけよう。
「まあ、頑張ってくれ。なるべく俺らは巻き込まないでくれよ」
「うん、解った」
アーリが素直に頷くのを見て安心する。
いくらこいつらが魔竜だとしても、自分の家の隣くらいには気を遣ってくれるだろう。こんなのんきに挨拶（あいさつ）したりする仲になったくらいだし。カタギの人間には手出ししないような、そんな義理と人情くらいは持ちあわせてくれていると思いたい。
なんか母さんがニヤニヤしてこっちを見ているが、何を考えているのかは気にしないでおく。ついでに言うと灯花は何故かちょっとムスッとしていた。

「ああ、母さん。ラスティから蕎麦貰ったよ」
俺はそんな母さんにさっき貰った袋詰の蕎麦を渡した。
「あら、ありがとうね、ラスタバンさん」
「ラスティとお呼び下さい、月夜野さん」
「あらそう？　じゃラスティちゃん。せっかくだから大晦日の日には貴女たち二人も一緒に年越し蕎麦を食べましょ？」
「え、よろしいのですか？」
「だってお隣さんだもの。ね？」
同意を求めるように俺を見られても困ります、母上。個人的には魔竜とあんまり仲良くし過ぎるのもどうかなー？　と思っているのですが。他の人間の皆さんからも距離を取られる可能性だって出てくるし。
……まあ母さんなら持ち前の明るさとのんきさでどうとでもしそうだな。
「兄さん、そろそろ出ないと学校の時間だよ」
灯花がそわそわしている。まだ時間に多少の余裕はあるものの、のんびり歩きたい灯花にしてみればギリギリな時間なのかもしれない。
「冬休みだっていうのに、学校で緊急全校集会なんて何を話すのかしらねー？」
母さんがのんびりした口調でソファから立ち上がる。
『緊急全校集会』、中等部と高等部の生徒全員が講堂に集まる集会のことだ。

昨晩遅くに回ってきた連絡網によって既に全校生徒には通知済みであるらしい。
「多分、私たちのこと」
アーリが自分とラスティを示して告げる。
「私たちが転入するから、学校側で紹介する場を開いて、とお願いしておいた」
またなんかそこで宣言するつもりだろうか。それにしても『お願い』って。
「お前の『お願い』は半分以上脅迫っぽくとられるから気をつけろよ？」
俺も家を出る準備をしながら、アーリたちを玄関に促しつつ注意する。
「そうなの？　解った」
なんかやたらと物分かりのいいアーリ。
もしかしたらこいつ、あんまりものを知らないだけで根は正直で素直なのかも。
のんびりした時間のせいか、ちょっと好印象になってしまっている俺だった。

◆　◆　◆

いかにも人目を集める四人での登校だったが、まだ朝早いこともあってそんなに注目を浴びずに登校出来た。

内心『魔竜姫とその部下』と一緒に登校なんて冷や冷やだったのだが。
校門に着いた辺りまで特に嫌な視線は感じなかったので一安心だ。
「私は職員室に行ってくる」
本日の主役らしいアーリはスタスタと……左側の中等部校舎の方に向かっていった。
「そっちじゃない、こっちだ。昨日も説明したろ」
慌てて肩を掴んで正面に方向修正する。
「最初からこっちに行くつもりだった」
「そういう嘘はいいから。ったく、仕方ないから職員室前まで連れてってやるよ」
こいつの方向音痴っぷりもかなりのもののようだ。もし戦うことになったらどこか迷路みたいな場所に連れ込めばいいのかもしれない。
「兄さん、講堂の席を取っておくね」
「おう、ステージが見易い位置を頼んだ」
全校集会は大行事ではあるものの、座席は生徒の自由だ。後ろの方で立ち見するという手もあったのだが、集会が何時間あるのか解らないので座った方が疲れずに済む。
「カガリさん、アーリ様を宜しくお願いします」
「解ってる。無事に職員室まで届けるさ」
深々とお辞儀して、灯花と一緒に講堂に向かうラスティ。
……昨夜戦っていた魔竜と聖剣が肩を並べて歩いているというのも、なんとも不思議な

気分になった。もしかしたら共存とかも楽勝なんじゃないかなあ、みたいな。
「灯花はいい子」
「どうした突然」
「ちょくちょくやきもち的な視線を受けていたけれど。でも私にも親切だった。いい子」
「ああ――まあ、善良な妹だよ。仲良くしてやってくれ」
「うん、解った」
心なしかアーリもちょっぴり嬉しそうだ。こいつは表情が変わらないから感情を読み取るのが難しいが、なんとなくその言葉に温かみみたいなものを感じる。
「職員室は二階だっけ」
「正面の窓だ、ってこないだも教えたろ」
「今のはカガリを試した」
「そういうのは案内される側がしなくていいから」
というかちょっと子どもっぽいのかもしれないな。こんなお茶目なヤツが魔竜だと言うのだから、世の中は本当によく解らない。
「ところでカガリ。――私たちは見られている」
「そりゃ、お前は有名人だから見られるのも当然だろ」
「これは多分『敵意』」
「……なんだと」

アーリの言葉に剣呑（けんのん）な気配を感じた俺は――学園の屋上から俺たちを見ている視線に気がついた。五階建ての校舎の上から降り注ぐそれは、俺でさえピリピリしたものを感じる。
「お前は敵意で見られるのをむしろ望んでいるんだろ」
「その通り。これはきっと聖剣の視線」
アーリの声が弾んでいる。向こうも敵意を隠すつもりがないのだろう。俺たちが露骨に足を止めて見上げても、その人物は隠れたりする様子を見せない。
――そこには朝の太陽に輝く金髪を、華麗になびかせた少女がいた。
「……あれが……？」
灯花以外の聖剣。
年齢は俺たちより下だろうか。背は多分灯花やラスティよりも低く、小学校高学年か中学生女子くらいしかないだろう。あどけない顔立ちの中に、キラキラと強い意志を示すような瞳があって、顔立ちはどことなく誇り高さめいたものを感じさせる。あの特徴的なまでに鮮やかな金髪は雄々しい雰囲気すら醸し出していた。
その視線はとても挑発的で、ちょっとゾクっとしてしまう。
……まあ、いいか。
これでこの金髪さんがどんどん魔竜のお相手をしてくれるのなら、それに越したことはない。俺たちは晴れて、のんびりした年越しが出来るというものだ。
「しかし金髪ってことは転校生かなあ」

などとアーリに話しかけてみたら、近くにいたはずのあいつがいない。
「アーリ？」
「今からお話に行く」
言葉とは全く関係ない校庭の方にスタスタ歩いて行く後ろ姿があって。
「そっちにはアイツはいないぞ！」
俺は大慌てでその背中を追いかけたのだった。

◆　◆　◆

結局アーリは屋上どころか校門から出そうにすらなっていたので、俺は半ば無理矢理引きずるようにして職員室に放り投げておいた。
だから俺が講堂に着く時間は結構遅れてしまい、灯花たちが確保しておいてくれた席に座れたのはもう開会式が始まるギリギリの時間だった。
劇場型、と呼ばれる講堂。二階席まである広大な中身を見回していると、ほとんどの生徒はもう着席済みであるようで、ざわざわとした喧騒（けんそう）が賑（にぎ）やかだ。
「お待たせ。あいつ、勝手に歩き出すから結構苦労したよ」

「す、すみません……アーリ様は昔から方向音痴なのに妙に自信だけはあるんです」
「いるよな、そういうタイプ」
率先して自信満々に歩く人に付いて行くと実は迷っていた、ということがある。アーリもその手の方向音痴なのだと理解しておこう。
「それにしても、ずっと思っていたのですが。カガリさんの声……どこかで聞いた気がします。それも、最近聞いた気が……」
今になって明かされるそんな言葉に、着席早々ビビらされた。
「き、気のせいじゃないですか、ゴホゴホ」
「兄さん……露骨っぽいよ」
「実は俺の声がイケメン声優の声に似ているとかどうよ」
「うーん。どちらかと言うとコメディ担当っぽいかな？」
「あっさり否定するなよ灯花」
「ふふっ。仲のいいご兄妹なのですね」
やんわりと笑って俺たちを見るラスティ。アーリにしろこいつにしろ、会って会話している分には良い子だ。むしろ昨日までにこの大人しい性格を知っていたら、俺はあんなに容赦なくやっつけられなかったかもしれない。
「おや、カガリ。随分と可愛い女の子たちと一緒だね」
かけられた声に振り向くと、後ろの席に座っていた眼鏡男子が体を乗り出していた。

その端整な顔立ちを見て、周りの女子たちはヒソヒソと何事か話している。
雨流公司。俺のクラスメイトで、よくつるんだりしている友人だ。
「お前の方こそ、女子たちが噂話してるぜ」
公司の近くにいる女子たちが、チラチラ、チラチラと見ては微笑んでいる。
こいつは女子の人気があるくせに、ほとんど浮いた噂がない。
――むしろ俺との噂がある、と以前灯花に知らされた日は死にたくなった。
ちなみに勉強も出来て人当たりも良い性格で、今年の秋に開かれた生徒会選挙では書記に立候補して見事当選していた。いわゆる完璧超人なのである。
「灯花さんもこんにちは」
「うん、こんにちは」
灯花はそんな完璧超人がちょっと苦手なのか、少しだけ俺に身を寄せた。確か、完璧過ぎる人は苦手、とかいう理由だったはず。俺もそう思う。こいつの柔和な笑みと態度はとても躾が行き届いたお坊ちゃんな空気があるのだ。
「そしてそちらのお嬢さんも初めまして。雨流公司です」
「初めまして、ラスタバン＝エルタニアと申します。親しい者からはラスティと呼ばれていますので、そうお呼び下さい」
「おおっ、見事な礼儀正しさだ。僕は苗字で呼ばれることが多いから、雨流と呼んで下さいね、ラスティさん」

「はい、了解しました雨流さん」

丁寧なお辞儀をするラスティは転入生とは思えない落ち着きを持っていた。てっきり『魔竜です』とか名乗るのかと思っていたが、特にその様子はない。やっぱりアーリが特別だったんだな。そもそもあいつは登場からして破天荒だったし。

「姉さんは？」

「この集会の司会をするらしく、舞台袖で先生と打ち合わせだよ」

我が家の日和姉さんは、実はこの学園の生徒会長をしている。

読者モデルをしつつ、生徒会長もしている。そんな多忙な日々を送っているのだ。

それでいて勉強もきちんとしているのだから頭が上がらない。なんでも『読者モデルも生徒会長もしていますと、頭が悪いイメージがついたら致命的なのです』とのこと。そういう辺りも徹底しているのは流石としか言いようがない。

「――で、公司は今日の全校集会の理由を知ってるのか？」

「まあね。転入生を二人紹介するらしいよ」

「ん？　二人？」

アーリの他にもこんな大舞台で紹介される転入生がいるのか。一応転入生になるはずのラスティはここでのんびり座っているというのに。そのもう一人とやらは、アーリレベルで特別ということか？

二人目が誰なのかを尋ねようとした時、講堂の明かりがぼんやりと暗くなった。

「しっ。始まるみたいだ」

公司が口に人差し指を当てて会話を打ち切ると、舞台上に姉さんがゆっくり現れた。

『これより『都市立美影中央学園』の全校集会を始めます。まだ立っている方は速やかに近くの席に着くか、最後部の立ち見席まで静かに移動して下さいね』

マイク越しにもよく通る声だった。家で発声練習しているのを思い出す。映像でインタビューされることもあるらしく、そういう時に聞き取りづらい声にならないようきちんと備えているとのこと。

ざわざわと席に着く他の生徒たちを眺めてから舞台を見ると、姉さんと目が合った。

ニッコリ、と嬉しそうに笑う姉さんに俺も微笑みかける。あんな場所に立っているというのに緊張した様子もなく、本当に堂々としたものだった。

『本日の集会では、二人の転入生を紹介します。お二人、舞台中央へどうぞ』

姉さんが促すと、銀髪の背の高い少女と金髪の背の低い少女が並んでやって来た。一瞬男子たちが美しい髪の少女たちの姿にざわめくが、その銀髪の方――つまりアーリが正面を向くとそのざわめきは動揺に変化する。

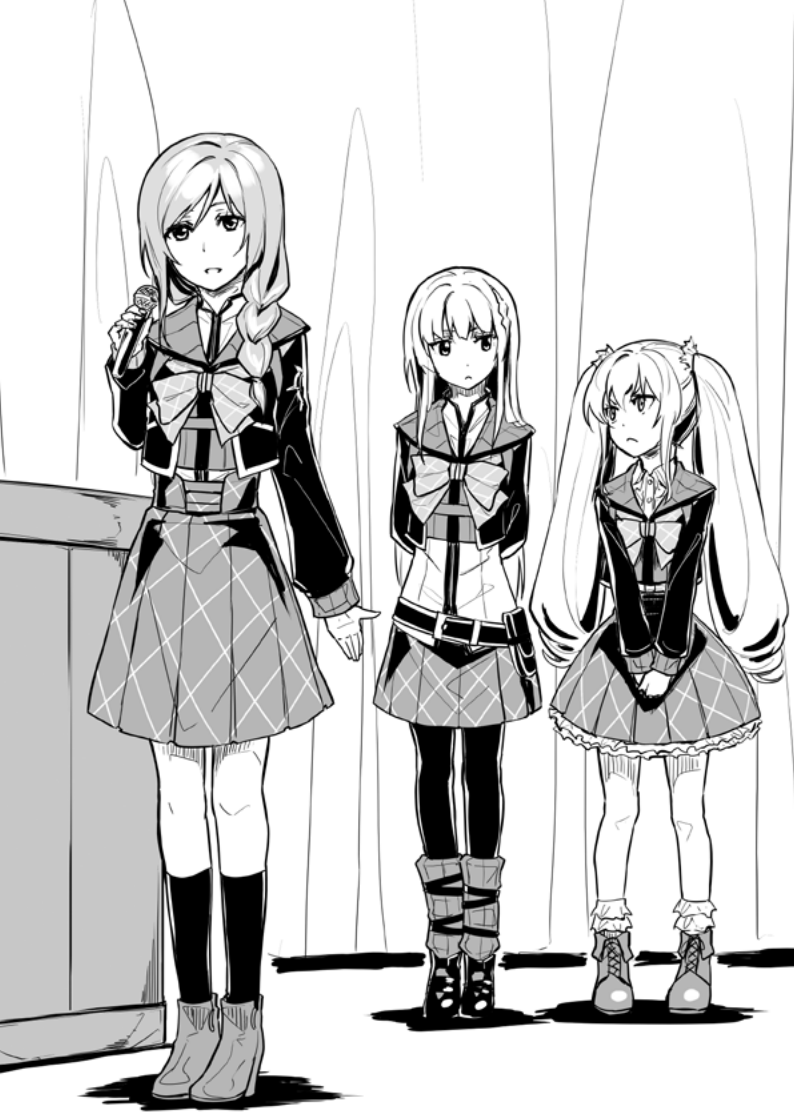
『皆様初めまして。私を知っている方はとっくに知っているかと思いますが……魔竜であり『六皇魔竜』のリーダーをやっているアーリアン＝D＝ハクアです。アーリと呼んでくれて大丈夫です』

そのざわめきが一層高くなる。やっぱり！　とか、本物か？　とか。そんな言葉が周囲

から聞こえていた。
「お見事な挨拶(あいさつ)です、アーリ様……」
そしてすぐ間近からはそんな感極まった声が聞こえてきた。
俺と灯花(ともか)はもう何も反応することもないので、心穏やかに過ごせるよう努める。
『はい、アーリさんありがとうございました。続いては――』
姉さんが金髪の彼女を促そうとした瞬間。
にこやかに笑っている少女は、それまで手に着けていた白い手袋を外すと。
そのままシュッとアーリに向けて優雅に投げつけた。

『わたしは聖剣の集う、国際的な防衛機関『カリバーン』から遣わされた聖剣の一人――
燁澄(かすみ)＝ハーネスと申します！　貴女(あなた)たち『六皇魔竜(ゼクストラグナー)』を、やっつけに参りましたっ！』

アーリの胸に当たって、そのまま舞台の床に落ちる手袋。
直後、会場が更に大きくどよめいた。
燁澄とやらは外見の幼い容貌(ようぼう)とは正反対に、とても豪胆な性格をしているようだ。
『そう、楽しみ』
マイクを通して、アーリの微妙に弾むような声が講堂内に響き渡る。
まさか、こんな場所でやり合うつもりじゃあるまいな？



そうなった場合は、まず舞台に駆け寄って、姉さんをすぐに逃さなければならない。

『いざ尋常に勝負いたしましょう！』

それにしても、いかにもな元気なお嬢様だ。外見はどう見ても外国出身だというのに、日本語はとても流暢だし。

『ううん。私はラスボスだから、ラスト』

しかしそんなノリノリな燁澄の申し出を、アーリはあっさり断った。

いやいや、そんな理由が通じる相手なのか？

『え？　うーん、ラスボスなら仕方がありません。では最後の一人は貴女ですよっ』

「いいのかよ！」

思わずツッコミを入れてしまう。緩いな、国際的な防衛機関。いや、本当は厳しいのかもしれないが、あの燁澄という少女が特別緩いのかもしれない。一人を見て全体を悪くイメージするのはやめておこう、うん。

しかし――本当に魔竜を追いかけて聖剣が街にやって来てしまった。

これでますます、この『美影開発都市』が『戦場』になる可能性が高くなる。

……母さんと姉さんだけでもどこかに疎開して貰おうかなあ。

俺と灯花はなんとかやっていけるはずだが、一般人である二人は今後大変になっていくだろう。そもそも、この学園生活だって怪しいものだ。アーリも、そしてラスティもいる以上、いつ校内が戦場になるか解らないのだから。

『以上で自己紹介と宣戦布告はおしまいです。皆様宜しくお願いしますねっ』

ふぁさっ、と金髪をかき上げて上品に宣言する燁澄。あれだけ物怖じしないのだから、やはりかなりの自信があったりするのだろう。

『それじゃあ、私から。全校生徒に聞いて欲しいことがある』

アーリがマイクで全校生徒に語りかける。

『今日のテレビやニュースで知っているかもしれないけれど。私の仲間の一人『金の魔竜』が昨夜、謎の聖剣士に倒された。姿格好や声からして中高生の男子。この街では中高生はこの学園にしか集まらないから――』

アーリはその無表情な視線で全体を見回して。

『この中に、私の仲間を倒した男がいる』

その瞬間。

講堂内にいる全員が同時に『ビクッ！』と大きく身を竦めた。

「きゃっ！」

「っ！」

壇上で姉さんが何かに気圧されるかのように転び、その体を燁澄が庇うように手で支えている。その二人の顔には、さっきまでの穏やかさはなく真剣な色が過ぎっていた。

……アーリの言葉と共に襲ってきたのは強烈な圧迫感だ。すぐ後ろから心臓に向けてナイフを突きつけられているかのような。喉を絞める為に首に手を添えられたかのような。こめかみに、拳銃を押し付けられたかのような。

――『死』に直面させられた、という恐怖。それが俺の体中を駆け巡り――。

それを向けた人物であるアーリから、目が離せなくなる。

『名乗り出る必要はない。そのままでいい』

そして、その視線が講堂の座席をゆっくりと見回す。その視線を向けられた辺りの生徒が蛇に睨まれた蛙のように脂汗を流して動けなくなっていた。中等部の制服を着た女子生徒の何人かは、アーリが視線をその方向に向けただけで、そのまま気絶してしまっていた。

――否応なしに、俺たち全校生徒は思い知ることになった。

その無表情な、感情のない視線はあくまで揺らいでいない。

だが、その言葉と視線に込められているのはただ純粋なる『殺気』。

瞳から、言葉の裏から感じ取れる威圧感。人間という種に『天敵』というものが存在するのだとすれば、それは紛れもなくそこに在る少女だった。

見れば、燁澄の両腕が微かに青白く光っている。こんな中で物怖じせずにアーリの背を睨みつけ、姉さんを守る為に何らかの力を使ってくれているのか。後で感謝でも伝えようと思ったが、今の俺はそれどころではない。

『私が――『六皇魔竜』が、必ず貴方を仕留めるから』

そんな視線と共に告げられた強い言霊のような力。『必ず仕留める』というそれには、本気で躊躇いもなく蹂躙する意志が込められている。

……酷く空気が重く、喉がカラカラになった。肺が呼吸の仕方を忘れたかのように息苦しくなり、目眩と吐き気が同時に襲ってくる。

――なんだ？

アーリアン、お前は一体……何を喚び出している!?

霞む視界の中で、アーリの背後に巨大な影の『うねり』があった。それは無数の長いモノが蠢いているような、醜悪なビジョンだ。

もしかして。あんなものが。

まだ『影』しか垣間見せていないというのに。それだけでもすぐに解る。
アレは世界を滅ぼすモノに違いない、と。
なんとか横目で見れば、灯花が青ざめて口元を押さえていた。無理もない、さっきまで穏やかに一緒に過ごしていたアーリが――今は、全く別の次元の存在に見えるのだから。きっと灯花にもあの凶悪な影が見えているのだろう。
「アーリ様……ここで力の片鱗をお見せになるとは……」
仲間であるはずのラスティすらもその声は震えていた。そしてその言葉を聞いて俺は絶句してしまう。アーリにとってのこれは、ほんの片鱗に過ぎないのだ。
『人々を恐怖、恐慌に陥れる魔竜』。
表情や立ち振る舞いは何も変わっていないのに、彼女は圧倒的な『密度』を伴ってその場に君臨していた。実際に出現させてはいないが、アーリの持つドラゴンの『気配』だけをその場に召喚させているかのように。
ラスティのドラゴンは神話で伝えられていた竜だった。
それなのに、アーリの竜はそんな神話よりも更に格上だとでも言うのか。
その本質は、その姿は、恐ろしく巨大で、何より強大な力を持っているのだろう。
アーリの目がゆっくりと、多くの生徒たちを恐慌状態にしながら俺たちに迫る。

――今、アーリと目が合ったらバレる。

それは直感だった。
俺は今のアーリに対して『どう対応するか』みたいなものを考え過ぎている。いや、考えざるを得ない状態にさせられている。もっと言えばこの場において『どう逃げるか』を考えていると悟られるだけでも、ただの人間ではないことが露見してしまうのだ。そう、既に『生徒会長を守る』という行動を取っている、壇上の聖剣娘のように。
俺はすぐさま、灯花を心配するように抱き寄せ、その頭に自分の鼻先を寄せた。
「あ……兄さん……」
これであいつが俺を見たとしても『気分が悪そうな妹を心配するカガリ』に見えているはずだ。……いや、或いは今のアーリはそんなことすら気にしないかもしれない。
そこに在るだけで君臨する、絶対者『魔竜姫』。
これは魔竜という存在がいかに恐ろしく、尊大で、人智を超えた存在であるのか。
この学園の生徒たちに知らしめるには最高の舞台だっただろう。
『うーん、やっぱり誰かは解らなかった。聖剣士。私は貴方と――別にこの燁澄でもいいけど――その戦いが出来ることを、とても楽しみにしている』
アーリの言葉が終わった瞬間、体がふっと軽くなった。

その場にいる生徒たちも同様に、呪縛から解放されたようだ。
体を縛っていた緊張がなくなり、次々と椅子に倒れかかる姿が目に入る。今名前の出た燁澄もどこか安堵が浮かんだような顔で手元の光を収めていた。
――アーリのヤツ。魔竜としての能力をチラッと見せるだけでこんなに凄いのか。
全世界に映像を流すような手はずなんてどうやったんだ、と思っていたが。この迫力で命令されたのだとすれば、命が惜しい人間はすぐに従ってしまうだろう。
『魔竜姫』――支配者か。
……。
ほんっっっきで戦いたくないなー！
俺は灯花の手をぎゅうぎゅう握りながら、とても泣きたい気分になっていた。
『聖剣レーヴァ・テイン』は確かに強い。Sクラスと呼ばれる聖剣らしい威力と破壊力を備えている。聖なる剣でありながら世界を滅ぼす『魔剣』という逸話の持つ表現に恥じない聖剣だ。
だけどそれでもアーリには勝てる気がしない。どんな卑怯で卑劣な手を使ったとしても勝てそうにない。少なくともさっきの迷路の中で戦えばいいなんて甘い考えは却下だ。
それこそあいつを口説いてメロメロにして戦わないで済ませる、とかの方がハードルが低いんじゃないかとすら思える。やらんけど。
冷や汗を流しながら恐る恐る舞台を見てみると、姉さんは壇上で座り込んでしまいなが

らも、気丈に緊張した笑顔でマイクを握り直していた。
『は、はい、というわけで。この二人は来年の三学期から皆さんと同じ、我が校の生徒として過ごすことになります。皆さん、仲良くしてあげてくださいねっ』
出来るかー!?
思わず姉さんにツッコミそうになるのをなんとか抑えて、俺はため息を吐いた。
舞台では丁寧に頭を下げるアーリの横で、妙にやる気を燃やした顔をしている燁澄が拳を握りしめている。あの威圧の中であの闘志を燃やし続けられたのだとしたら、本気で凄い聖剣なのかもしれないな。灯花はすっかり具合が悪そうにしているというのに。
『では、一番後ろの列の方から順番に教室に戻って下さい。ホームルームが終わった後に下校となります。これにて緊急全校集会を終了しますっ』
姉さんの終了宣言があっても、生徒たちのほとんどは何も出来ないまま。
落ち着くまでその場に残り続けるのだった。

◆　◆　◆

その後、ようやく講堂から出た俺たちは、灯花たちと別れて自分の教室に向かった。

なんでもラスティは俺たちのひとつ年上だったようで、二年生の教室に移動していった。
てっきりあいつはアーリと同じクラスになると思っていただけにちょっとビックリだ。
一緒に廊下を歩いている公司も流石に怖かったのか、言葉少なに歩きながら眼鏡をちょいちょい『ついっ』と直している。その仕草は眼鏡男子が落ち着く為の儀式みたいなものなんだろうか。よく耳をすますとカチカチと歯が震えていた。
まあ、うん。普通そうなるよな、あんなの体験させられたら。
「落ち着け公司。後はホームルームを終えて帰るだけのはずだ」
「そ、それが落ち着けない理由があるんだ、カガリ……」
その震える声を聞いて、なんとなく嫌な予感がした。
いや。俺はある意味、もう覚悟を決めていた。
「なるほど、解った」
もう何があっても驚くことなどすまい。そう思った俺はガラッと教室のドアを開ける。
「さっきぶり、カガリ」
当たり前のようにアーリが立っていた。ああ、うん、解っていたよなんとなく。どうせこいつは同じクラスに入るだろうな、と。
「どうだった？　カガリが言った通り『魔竜姫』らしく実力で怖がらせてみた」
……。
そういえばさっき、そんなことを言ったような気がする。

すまんみんな……、あれは俺のせいだったようだ……。
「凄く怖かった。危うく失禁するところだった。灯花も震えていた。だから、もうあんまり派手にやらんでくれ。ラスボスになるまでは普通にしてて欲しい」
「……確かに、さっきはちょっと脅し過ぎたかも」
僅かに視線を逸らしている。どうやらこいつなりに反省しているらしい。
「うむ。これからは出番があるまで、のんびり過ごしてくれ」
そしてそんなラスボスの出番なんてないといいな、としみじみ思う。
「そのつもり。私の番が来るまでは楽しくゲームしたり、アニメを観て過ごす。ちなみに日本にはそれが楽しみで来た」
意外に俗っぽいな。でも、外国の少年少女たちは日本のアニメ、ジャパニメーションで日本語を学ぶという話もある。アーリはこれだけ流暢に話せているのだから、それはもうかなり観ているのかもしれない。
「ゲームとかアニメですって!?」
そんな俺たちの所に聖剣・燁澄が物凄いスピードでシュパバ！　とやってきた。やっぱりこいつの方も同じクラスだったか。
「そう、ゲームとかアニメ。大好き」
「何を隠そう、わたしもですっ！」
得意げに胸を張って、腰に手を当てる燁澄。その微笑ましい胸が強調されるだけで、な

んとなく和んでしまう。
　もしかして、アーリが『魔竜宣言』したり、燁澄が決闘を申し出たりしたのは……我が国が誇るゲーム・アニメの文化のせいなのではないだろうな？　もしそうだったら嫌だから深く追求しないでおきたいが。というか敵なのにそんなことで聖剣が魔竜に親しげに話しかけたりしていいのか？　なんか凄い組織から来たんだろ、確か。
「っとと、……失礼いたしました。わたしは、燁澄＝ハーネスと申します」
　隣にいる俺が啞然としていたのに気付いたのだろう。スカートの裾を摘んで、ちょこんといかにも優雅なお嬢様、という挨拶をされる。
「さっき講堂で聞いたから知ってるよ。俺は月夜野カガリだ」
「ええ、知ってますよカガリさま。わたしは既に、この学園の生徒の顔と名前は頭の中にインプット済みですからねっ」
　えへん、と胸を張って得意げな笑みを浮かべる燁澄。
　全校生徒の顔と名前を覚えているなんて、もしかして結構な才女なのか？　アーリがあの宣言をしてからまだ二日しか経っていない。それからこの学校に来ることを決めたとしたら覚える時間なんて実質一日くらいしかないはずだ。
「なら話は早いな、うん。今後ともよろしくハーネスさん。応援してるよ」
「え、お、応援ですか。でしたらわたしのことは燁澄と呼んでくれて構いませんよっ」
　どこか照れたように、でも朗らかに胸に手を当てている。

　うむ、なんというか……発展途上だな。頑張れ。
　大きさ勝負では魔竜よりも明らかに聖剣の負けのようだ。ってかアーリって大きいよな。
「燁澄、カガリは露骨に私たちの胸を比べた」
「え？　む、胸をですかっ!?」
　真っ赤になってササッと胸を隠す燁澄。ああ、とても解り易い反応だ。
「ごちそうさま」
　せっかくなのでアーリの胸に手を合わせておく。
「日本ではごちそうさま、の後は『お粗末さまでした』と言うらしいけれど、私は自分の体つきは粗末ではないと自負しているので……ええと」
　アーリは少し悩んだ後。
「よきにはからえ」
「いや、微妙に違うと思うぞ」
「そう？　やっぱり日本語は難しい……」
　言語の壁が目下の所アーリの敵のようだ。
「ところで魔竜の姫、アーリさん」
「何？　聖剣のお嬢様、燁澄」
「こちらのカガリさまは何者なんですか？　わたしは寒い中ずっと屋上で待ち構えて見ていましたが、一緒に登校してましたよね？」

ああ、あれ寒かったんだ。登場シーンとしては結構格好良かったんだけど。なんか特別に格好付けるのって、現実だと結構大変なんだな。

「私のフィアンセ」

ガタッ!!

教室にいるクラスメイトたちの視線が、一斉に俺に集まった。

「フィ、フィ、フィアンセなんですか!?」

「うそ」

「ああん、騙されましたー!! 流石は魔竜の姫ですっ。……えーと」

どこからともなく取り出したハンカチを噛んで悔しがる燁澄。

「きーっ、悔しいです!」

「なんて古典的な悔しさアピールなんだ」

俺はアーリにツッコミを入れるよりも先にそこが気になって仕方なかった。

「え? 日本では悔しい時にはハンカチを噛んで引っ張るのでは?」

「私もそう学んでいた。違うのカガリ?」

「なるほど。アニメや漫画の見過ぎという言葉はお前らみたいな偏った文化に影響された人々に使うべきものだったんだな」

「がびーん! アニメや漫画の知識は嘘なんですか!」

「がびーんって。お前何年前の漫画読んでるんだよ」

「流石にそれが古いことは私にも解る」

「そ、そうなんですね? ううう……勉強し直しませんと……」

俺としてはこういう『勘違い国際交流』はそれなりに楽しい。

だが、一見和やかなトークをしている俺たち三人を……公司を始めとしたクラスメイトたちは、遠巻きに見ていた。皆一様に檻から解き放たれた猛獣を見るような目で見ている。そりゃあ、さっきあんなに怖い目にあえば、今のこいつがどんなにクールなボケキャラでも近寄りがたいのだろう。

むしろ『なんでカガリはそんな普通に話してんの!?』という顔もされている。

そこについては俺だって誰かに尋ねたいくらいだ。

「あー……アーリ。それと燁澄。こいつらは善良なクラスメイトたちなんだ。頼むから友好的に接してやってくれ。怖がらせたりすんの厳禁な」

「解った。そうしてみる」

「うふふっ、わたしはアーリさんと違って『正義の味方』ですからねっ! あっという間にクラスの皆さんとも仲良くなってみせますよ!」

「私だってやってみせる。そういう所でも聖剣には負けない。友達百人で富士山の上に登ってみせる」

ほっ、良かった。こういう所は、物分かりのいい二人だ。

「おーい、仲良くしてくれるってよー」

クラスメイトたちに話しかけても、みんなは困ったように顔を見合わせている。無理もない。俺だって本当は戸惑いばっかりだ。今の俺がこうして普通にやれているのは『どうせこうなるんだろうな』という諦めの覚悟があったからに過ぎない。

「はいはーい、月夜野くん、早速転入生ちゃんたち二人を口説くのはほどほどにして、みんなも席についてねーっ」

明るく元気な声と共に、我がクラスの担任である水上先生がやってきた。

外見年齢二十歳前後。ナイスバディっぷりとニコニコした顔、元気で気さくな雰囲気から生徒、特に男子に大変慕われている女教師だ。

「私たちは口説かれていたのね」

「え!?　そ、そうだったんですか!?　で、ですが、わ、わたし、そんな、いきなりそんな殿方と結婚だなんて……その、に、任務で来たわけですし……」

見てすぐ解るくらい思いっきり真っ赤になって、両の頬を手で押さえていやいやをしている燁澄。アーリもそれを真似して、全くの無表情、無反応な頬を押さえて顔だけ振る。

「そういうのいいから席につけ二人とも。先生も適当言わないでくれ」

「あははっ！　ダメよ、月夜野くん！　先生のボケも二人のボケもそんなおざなりに扱っちゃ可哀想でしょっ。めっ」

先生はニッコリしたまま、俺のおでこに指を当てた。

「ツッコミはＭＰをかなり使うんですよ。朝から大変だったせいでもう残っていません」

「そう。確かにカガリは朝からとても激しかった」

ざわっ。どよめいて俺を見るクラスメイトたち。

「もう説明もツッコミもしないからな！」

俺はここで高らかに宣言をする。むしろいざという時に、フィアンセになったりしてしまえば生き延びられるというなら、それも辞さない覚悟すらする。

「ふふっ、それじゃあ月夜野くんはこの後、二人に校舎案内してあげてね？」

「何故ですか先生。そういうのはクラス委員長とか日直の仕事でしょう」

クラス委員長でもある公司は『ノーサンキュー』と手を向けて首を振っており。本日の日直である女子、若柳さんは涙目で俺を見つめていた。

くそっ、公司はどうでもいいとして、ごく普通の女の子に泣かれたら仕方ないな！

「……解り……ました……」

「うん、よろしい！　それじゃあみんなー、ホームルーム終わらせて帰るよー」

露骨にみんなは安心したようなため息を吐いた。

「あ、あれ……カガリさまがわたしたちを口説いていらっしゃったというお話は？」

「その話はとっくにスルーされていた」

「なんということでしょう！」

そしていかにも古典的にショックを受けている燁澄をアーリに任せると、俺は自分の席に向かったのだった。

ホームルームが終わり、みんなが「それじゃあ月夜野任せた！」とばかりに足早に去っていくのを見送りつつ、俺はスマートフォンのメール画面を開いていた。

『タイトル・灯花へ。
なんか魔竜姫と聖剣さんを学校案内しなきゃいけなくなった。
姉さんとでも先に帰っててくれ。とほほ。
お兄ちゃんは泣きそうです〜〜〜〜』

涙の絵文字を三つも添えて送信する。
すると一分も待たないうちに返事がきた。

『タイトル・兄さんへ。
よしよし』

◆　◆　◆

たった四文字の返事なのにちょっと癒された。ありがとう我が妹よ。
「メール？　灯花と？」
「こらこら、覗きこむなアーリ」
慌てて画面を隠しつつ。
「ちょっと羨ましい。メールとかしてみたい」
「携帯電話持ってないのか？」
「持ってない。から、今度買おうかと」
「でしたら、わたしの使ってるスマートフォンのシリーズが使い易いですよっ」
「なるほど、見せて」
歩きながら、いかにも女子高生らしい会話をしている宿敵のはずの二人。
本当にそのまま仲良くずっと過ごしてくれないかなー、と切に願う。
「それにしても広い学校ですねっ。探検が楽しみな施設がいっぱいです」
「私は既にこの学園内を網羅した」
「ええ、そうなんですか!?　い、いつの間に！」
「常に聖剣よりも先を行くのが魔竜の役目」
「くぅっ！　さ、流石です……わたしも頑張りますよっ！　表の学園だけでなく、クリア後に現れる裏学園すらも踏破してみせます！」

「しまった、裏学園はまだ回っていない」
「ふっふっふー、今に見ていてくださいっ。宝箱の出し方もぜーんぶ変わっていますからね。校舎内は正に魔窟ですよ！」
「そうなの。ダンジョンの形やアイテムの位置が変化するのかと思っていた」
裏学園てなんだ。ここには結構長いこと通っているが、そんな言葉を聞いたのは初めてだ。そして、二人が言っているのは何かのゲームに違いないが、なんとなくその内容はお互いに違うものを示しているような気がする。
「と、いうわけでカガリさま。わたしに校舎内の案内を、宜しくお願いします」
ペコリ、とちゃんとお願いしてくる辺り燁澄はいい子なのかもしれない。小さい体できちんと礼儀正しいことが出来ていると、それだけで愛でたい気分になるから不思議だ。お嬢様育ちというか、元気で丁寧だけど緩いところがある、みたいな。
「ああ、解った」
まあいい。早く案内して俺も帰るとしよう。
「早速校庭でも見せるとしよう」
「いきなり校舎内ではありませんでした！」
燁澄のビックリっぷりはとても見事だった。俺のボケにそのままビックリツッコミしてくれると心が癒される。流石は聖剣仲間だな。
「校庭は行ったことないかも」

「嘘をつくなアーリ。お前初日はまっすぐ校庭に突き進んでたろ」
「そんなはずはない。あれは職員室だった」
そしてこいつはなんで頑なに方向音痴を認めないんだ。
「いいから行くぞ。まずは外から校舎を把握するところからスタートだ」
「なるほど！　全体像を掴むのはマッピングの基本ですものねっ！」
燁澄なりに納得してくれたようだ。
二人はキョロキョロと周囲を見回しながら俺の背中に付いてくる。校舎内にはほとんど生徒は残っていないみたいだ。たまに見かけたとしても、もう帰ろうとしている姿ばかり。確か部活も今日は休みなんだっけな。
そんなわけで、俺たちがほとんど人のいない校庭に向かって歩いていたら――。

階段を降りた所で、全身赤ずくめの男と出会った。

まず髪が赤い。服のインナーも赤い。パンクっぽいジャケットも黒と赤の模様。そして頭に巻いているバンダナも赤系の模様だった。
『赤』は……なんとなく嫌な思い出のある色なので、それだけで警戒心が湧いてしまう。
「よう、アーリ様！　聖剣がいるって聞いて早速来たぜ！」
「あれ、もう来たの？」

「そりゃあ来るだろ！　ここに『炎の聖剣』がいるとか言われたら、この魔竜炎士、羅剛計都様の炎とどっちの方が強いか、勝負するのが当たり前だ！」
　赤い人物こと、羅剛計都さんとやらは指輪をいっぱいつけた拳を見せてニヤリと笑っていた。自分に様付けの辺り、とても解り易い性格のようだ。
「うん『世界を包む終末の炎』と称されるレーヴァ・テインは本当に凄かった」
「ヒィー！　早く会いたいぜ『レーヴァ・テイン』の聖剣士!!」
　正にそれは俺です、と内心は思っていたが勿論口には出さない。
「ところで今の会話の流れからして、あの方は魔竜なのですね？」
「その通り」
　燁澄がのんびりと確認すると、アーリが頷いた。
「であれば、わたしの敵です！」
　途端に、燁澄は俺を庇う位置に立ちはだかってくれた。
　……ちゃんとまずは一般人を守ろう、という意識から入るんだな。ついでに魔竜姫であるアーリも一緒に庇った辺り、ちょっと勘違いしている節はあるが。
　当たり前のように誰かの前に立てる燁澄は偉い。俺はとてもじゃないが、俺自身と灯花と、後は家族を守る時くらいしか前に立てない。友達がピンチだった時は軽く悩むかもしれない、それくらいのものだ。
「あん？　なんだお嬢ちゃん。もしかしてあんたは聖剣なのか？」

「わたしは聖剣の集う、国際的な防衛機関『カリバーン』から遣わされた聖剣の一人――燁澄＝ハーネスと申します！　貴女たち『六皇魔竜』を、やっつけに参りましたっ！」
　さっきアーリに投げかけた言葉を一言一句違えずに宣戦布告する燁澄。きっとこのセリフは何度も練習したに違いない。しかし今は手袋をしていないので、指をビシッと突きつけているだけだ。
「ほほう、じゃあ……お嬢ちゃんがラスティを倒した『レーヴァ・テイン』か？」
　計都が白い歯をむき出しにしてニィ、と不敵に笑う。……この男、こんなにも解り易くバトル大好きっぽい風情だが……その動きや立ち方に全く油断がなかった。
『いつ仕掛けられても対処出来る』
　そういう姿勢が当たり前に取れているということは――戦い慣れているということか。
　昨日はラスティ自身が油断してくれていたおかげで、速攻倒せたのだが……。正直、こいつはそう簡単には行かないムードが漂っている。
「違います。ですが、わたしの『聖剣クラウ・ソラス』とてAランクですからね！　『あらゆるものを切り裂く光の刃』でお相手いたしましょう！」
　へええ、燁澄はそんな名前の聖剣だったのか。確かにとても強そうな雰囲気だ。こいつ自身はちょろいお嬢様っぽいが、そういえば国際的にまっとうな機関に所属している人物である。ちゃんとそれなりに戦いの経験はあるはずだ。
「いいぜ、お嬢ちゃん。『レーヴァ・テイン』の前にまずは『クラウ・ソラス』から焼き

尽くしてやんよ!!　表出ろ!!」
「望むところです!!」
計都はくるっと俺たちに背を向けると、ペタペタと歩き出した。よく見れば来客用のスリッパを履いている。
「見かけによらず、意外と律儀なんだな」
「計都はバトルジャンキーだけど、社会のルールは守りなさい、って命令してあるから」
「命令なのか」
ラスティとは姉妹みたいに仲良くしていたので忘れていたが。そういえばこいつはリーダーなんだった。
「うん。喧嘩を売ってきたから、一瞬で蹴散らした。そうしたら仲間になった」
講堂のアレを見れば、アーリはそれくらい強くて当たり前か。
さて俺はどうしたもんかなあ、と考え込んでいると。

ピンポンパンポーン。

『校内に残っている皆様。校内に残っている皆様。校庭で魔竜と聖剣の戦いが始まります。大至急学園敷地内より立ち去って下さい。繰り返します。校内に残っている皆様、危険なので大至急学園敷地内より立ち去って下さい』

ピンポンパンポーン。
突然の校内放送にビックリした。
「今の声はラスティ」
「あ……ああ、なるほど。一般人を巻き込まない為に、か」
「その通り。学校敷地内で戦うことになったら、施設が壊れた分は私たちが弁償すると学校側には伝えてある。人を巻き込まないようにするのはなるべく双方が頑張る、という取り決めを学園の偉い人ともしておいた」
既に学校サイドとは話がついている、ということか。なんか話がこいつにとって上手くいき過ぎている気がするが。
アーリはぼんやりして見えるが結構政治力みたいなものも高いのかもしれない。もしくは、そんなアーリに入れ知恵している仲間がいるかのどちらかだろう。
まあ、一応お姫様なくらいだから政治力くらい高かったりするのかもな。
俺が感心していると、アーリはゆっくりと歩き出そうとした。
「どこに行くんだ？」
「屋上。戦闘を見物する」
そういえば俺の時も、こいつは手を出さずに見物していたっけか。

「カガリはどうするの？」
「俺は灯花を迎えに行ってそのまま逃げるよ」
「うん、それが賢明」
アーリはちょっとだけ、ホッと息をこぼす。
……今のそれは安堵の吐息だろうか？
「いいか、ちなみに今降りてきた階段を上り続ければ屋上だからな」
背後の階段を示して念を押しておく。
「うん、それくらい知っている。カガリは過保護」
そんな非難の言葉を告げつつ、アーリは早速階段には目もくれずに廊下をスタスタと歩いて行ってしまった。
階段を上る段階から間違うのかよ！　とツッコミを入れようにも、その足取りは案外速くてもうその背中は遠ざかってしまっている。まあ、いずれ階段にさえ差し掛かればそこを上る意識も持ってくれると信じよう。
「さて、俺はどうするかな」
このまま燁澄に全部任せるというのも手なのだが。
……念の為、計都の強さは見ておきたい。もしも俺がなんとかしなきゃいけなくなった時の為に。あくまでもしもの話にしたいところだけど。

◆

◆

◆

「せりゃあああっ！」
計都の掛け声と共に、校庭の中央にいる中華系の龍が紅蓮の炎を走らせた。
「はっ！」
炎が一直線に向かう先に、聖剣として『光輝』をイメージさせるような装束と、青白い輪光を四肢に纏う騎士のような姿の燁澄の体がある。そんな彼女は動くだけで光の軌跡を描きながら、上手いこと地面を一回転してその炎を回避していた。
いつも過ごしている学園の校庭であんな派手なバトルをされるとは思わなかった。俺は二人の様子を、校舎の陰から見守る。丁度目の前には植え込みがある為、向こうから見えることはないだろう。そして校舎の陰なので、屋上からも見えないというベストポジションだ。距離は大体五十メートルほど。これくらいなら問題なく細かい様子が見える。
――しかし燁澄は灯花みたいに『聖剣』というわけではなく、むしろ俺みたいに聖剣士、ということだったのかな。だとするとどこに聖剣がいたのかは解らないが、まあ今はそこまで気にせず観察することにしよう。
「次々行くぜ！」

計都がその頭に乗っている真紅の龍――形は西洋のものと違い、より蛇っぽい要素が強めの『龍』が体をうねらせると、それだけで火の玉が無数に降り注ぐ。それを操ってニヤニヤ笑っている計都の体はぼんやりと光っており、まるで実体ではないかのようだった。

「ハァッ！」

そんな火炎球の雨の中、青白い光が一筋のラインとなって走る。

それは燁澄自身が移動した後に現れる光の軌跡だった。その閃光（せんこう）が走った瞬間には、あいつの体は別の場所に現れているのだ。

光速に近い速さで動くことが出来るようになる聖剣。それが『クラウ・ソラス』の持つ力らしい。レーヴァ・テインが果てしないまでの黒炎の出力を持つように、クラウ・ソラスは持ち主を『光』のように動かせるということか。

「それくらいの攻撃は、止まって見えますよ！」

燁澄の両手には青白く光る二本の剣が握られており、彼女が動く度に青白い尾を引いている。確かにあの速度があるならば、並大抵の攻撃は止まって見えるのだろう。

「やるじゃねえか、じゃあこれならどうだぁ！」

計都が手をかざすと、炎が輪の形を描いて龍の周囲に広がっていく。

「クラウ・ソラス、お願いします!!」

燁澄がその剣を十字に構えてから一閃（いっせん）すると、炎の壁が彼女の前で十字の型に切り裂かれた。計都の多様性のある炎の使い方もおっかないが、燁澄の回避方法のバリエーション

もかなりのものだ。何度も何度も、長い間訓練し続けてきたのだろう。燁澄の動きからはその自負みたいなものも見てとれる。

「ちょこまか避けたり斬（き）ったり、確かに腕はいいようだな聖剣！」

「その減らず口もそこまでです、魔竜！」

「やってみろよ『クラウ・ソラス』!!」

計都が叫んだ瞬間、周囲に大きな三本の火柱が立ち上る。

「そら！」

それらの火柱は燁澄の方にぐるぐるとゆっくり回転しながら、彼女の動ける範囲を狭めていった。燁澄はそれら三本の動きをじっくりと見ながら――。

「ここですね！」

一点突破。炎の柱が行き過ぎるほんの一瞬の間を縫って包囲から飛び出す。

あれだけの攻撃を受け続けていながら、落ち着いた判断。そしてそれをすぐに実行に移す決断力。明らかに戦い慣れている計都に対してとても上手く立ちまわって……。

「上手く立ちまわってねえ!?」

俺はそれらの戦いっぷりを、それはもうハラハラ見守っていた。

っていうか、今まで何度攻撃するタイミングがあったと思ってんだあの女！

「フッ、わたしは貴方（あなた）の――『真紅の炎神・燭竜（しょくりゅう）』には負けません！」

格好良く右手の剣を突きつけて宣言する燁澄。

確かに燁澄は避けるのが得意っぽいので、このまま戦い続ければ案外負けないのかもしれない。だが、圧倒的に『攻撃の機』を逃しまくっている。

例えば、計都は燁澄を舐めているからか必ず攻撃前に合図してくれている。つまりヤツが何か喋り出した瞬間、炎が現れる前に燁澄の速度なら深く切り込んでいけるのだ。あいつはどうやら相手の攻撃を『見て』から逃げるということも出来ているようだし。一回斬りつけてからすぐ逃げる、というヒットアンドアウェイを駆使すれば攻撃しまくれる。

なのにさっきから避けることに専念し過ぎで、一向にあいつは攻撃しない。

そう、まるで――実戦で敵を攻撃するタイミングが掴めないルーキーのように。

「言いやがる。じゃあこいつでどうだ！　『炎竜焦土』!!」

ドラゴンの下から炎が波のように現れる。ってか今だろ今。正にこのタイミングで突っ込んでいれば発動前に斬りつけて、発動後には離れられただろう、あの速度なら。

「今度は炎の波――色んな技があるのですねっ」

いやいやいや、なんでじっくり確認して不敵に笑ってるんだ!?　敵の技なんてもんはチラッと見るだけでいいんだよっ！　わざわざ確認の必要なんかないだろ！

「さあ、この炎の波は斬りつけたくらいじゃ消せないぜ？」

「なんとかしてみせましょう！」

超ダッシュして敵に向かってジャンプ！　とかしろ燁澄！　そうすればお前の速度と跳躍力なら、足元を斬りつけるだけでいけるんだよ！　例えば波が通り過ぎた後の部分とか

だけ斬ればいいんだ……って、なんで剣を十字に構えて耐えるつもり満々なんだよ!?
「さあ、いらっしゃいなさい！」
「ふん、耐え切ってみせろよ『クラウ・ソラス』!!」
ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!
圧倒的な熱気が一気に燁澄に襲い掛かる。その体が青白く光っているのを見るに、なんとか防御しようとしているのは解るのだが――。
「きっ……きゃあああっ!!」
案の定、押し寄せる炎に飲み込まれ、そのまま思いっきり波に流されてしまっていた。攻撃のタイミングを掴めない――ということは、まだまだ燁澄が訓練レベルでしか実戦を経験していない素人ということだ。だからこそ、敵の技に対しての反応しか出来ず、こうして対応出来ないものが迫ると対処出来なかったのだ。
「おいおい、Aクラスの聖剣ってのはこんなもんかよ」
ドラゴンの上で計都が呆れていた。
俺と灯花の『レーヴァ・テイン』がSクラスというのは破格の攻撃力からして解る。だが『クラウ・ソラス』がAクラスだからってそんなにも強さが変わるわけではないだろう。やはり原因は燁澄自身が『そういう』相手を想定した訓練をしてこなかったというだけだ。

炎の波は俺のいる壁際まで流れてきていた。校舎をちらっとしか焼かなかったのは、計都が手加減をしたのかもしれない。こう、アーリのいる校舎を壊さないようにした、とか。
「は……ぅ……くぅ……」
燁澄のうめき声が聞こえた。見れば、校舎の壁に叩きつけられたかのようにぐったりともたれかかっている。校庭の中央からこんな場所まで流されたとなれば、それはそれで結構なダメージではなかろうか。
――しかし、燁澄自身がルーキーっぽいのもそうだが……なんというか、それにしたって弱すぎる気がする。訓練以前の、もっと根本的な部分で何かが『足りていない』気がするのだ。
「負け、られません……」
計都との力量差は明らかだった。経験もそうだが、聖剣としての出力みたいなものも圧倒的に劣っているようにしか見えない。
聖剣、なんてやってる以上は負けられないのは確かだろう。だからそこは『当たり前だな』なんて冷たく理解する。とはいえ、だったら『カリバーン』という組織はどうしてそんな弱いヤツを。素人を、この街に派遣したのだろう。
「聖剣として……カリバーンとして……負ける、わけには……」
……やっぱりあいつは『聖剣』と自分を呼んでいる。
つまり、俺のように灯花を扱う『聖剣士』ではなく。

――『聖剣』そのものが、剣を出して戦っている……？

「もしかして、あいつは『持ち主』がいないから全力を出せてない……とか？」

燁澄自身が聖剣なのだとしたら、聖剣と同時に自分自身の体も顕現していることになる。つまり、聖剣の出力と自分の体の維持にその『力』を割いているので、本来の力の半分以下しか聖剣の実力を出せていない……とかだろうか？

灯花を一人で戦わせるつもりなんてないからレーヴァ・テインでは確認していないが、そういうこともあるのかもしれない。

だとしたら、余計に計都と戦って勝てるわけがない。実力の半分しか出せないんじゃ、あの歴戦っぽい魔竜には歯が立たないだろう。

「うーむ……」

俺が燁澄の様子に納得していると、再び放送が入った。

ピンポンパンポーン。

『こんにちは、アーリです。現在『六皇魔竜』の一人と聖剣が戦闘中です。ちなみにこの聖剣が負けると、この学園は火の海になります。校内に残っている生徒の皆さんは速やかに避難して下さい。また、校内に残っている『レーヴァ・テイン』は、速やかに助っ人した方がいいと思います』

――なるほど。だから計都は燁澄が死なないくらいの攻撃しかしていなかったのか。

明らかに勝てる戦いを長引かせていた。それは俺――『レーヴァ・テインの聖剣士』を誘き寄せる為だったのだ。

そしてアーリもこの戦いを屋上で見て、燁澄では計都に勝てないというのを見越したのだろう。だからこそ、燁澄をだしに使って誘き寄せる放送を流した。

アーリはこの学園の生徒がその正体であると目星をつけていた。そして――まあ実際に俺がそうなのだから否定は出来ないのだが――この戦いを見ていると予想したのだ。

きっと灯花もどこかで俺からの連絡を待っているに違いない。

いやむしろ……。

もし灯花がどこかで待っているのだとしたら。

このまま校舎が燃やされたりしたら、あいつが危ない――!!

「くっそ……！　アーリの声で放送ってことは、今は放送室だからこっちは見てないんだよな。そして、多分ラスティも放送室まであいつを案内したはず……」

アーリの方向音痴は筋金入り。であれば、ラスティも付き添ったのは当たり前。

そう『今』なら、あいつらの目を掻い潜ることが出来る。

「ふー、やれやれ。そんじゃあ俺は『レーヴァ』待ちといくか！」

計都は、燁澄が倒れたとみたのか、ドラゴンの頭の上で寝転がる。

完全に『クラウ・ソラス』からは興味を失ったようだ。
さっさと灯花と合流して、ここから一目散に逃げるのが最良だ。校舎は燃えるかもしれないが、幸い冬休みだし。被害も建物だけだったら俺の生活には問題ないだろう。
だが……。
「くっ……わたしは、勝たないといけないのに……っ」
ボロボロの燁澄は、それでも戦意を失っていないらしい。
ずりずり、ずりずり、と這うようにして戦場に戻ろうとしている。
「勝って、魔竜を倒して、姉さんに会わないといけないのに……！」
唇を噛み締めて、目には涙を浮かべながら。
明るくて元気だった様子とは一転して、真剣で苦しそうな面持ちで進む燁澄。
――姉さん、か。
あんなに賑やかにしていた燁澄にも、どうやら何かの事情があるようだ。それはそうだろう、聖剣とか魔竜なんてものをやっていれば、少なからず色々特別な人生を歩んできているはずだ。暗いことだって、人に言いたくないようなことだって、あっただろう。
だというのに、燁澄は――明るく堂々と宣戦布告したり。アーリと異文化コミュニケーションをしたり。朗らかに過ごしたりしていたのだ。
「姉さん……!!」
噛み締めた唇から血が流れていた。

……正直、突然そんなシリアスな顔をされてしまうと困ってしまう。俺は俺。燁澄は燁澄。あいつは負けて、俺は灯花を守る為にここは逃げようと思っている。俺には家族を守るくらいしか費やす手はないし、何より他人の事情まで背負うような余裕はない。
だというのに。
俺の体は、こっそりと燁澄に近寄ってしまっていた。
なんでそんなことをしているのか、自分自身でもよく解らない。
強いて言えば『姉さん』と呼ぶあいつの声が『兄さん』と呼ぶ灯花と重なった。
……そんなところなんだと思う。
「おい……燁澄、燁澄っ！」
姿勢を低くして、スニーキングミッションのような姿勢で燁澄に接近。囁き声でありながら、あいつの耳にも届きそうなギリギリの音量で声をかける。
「くっ、わたしは負けるわけには……」
しかしまるで聞こえていなかった。
「それは解ったから、とりあえずこっちを見ろ！」
「……ふぇ？」
こそこそしている俺を見て、きょとんと振り向く燁澄。その口が『あ、カガリさま』と口にしそうになったので、俺は燁澄の口を慌てて手で塞ぐと、そのままずりずりと小柄な体を校舎の陰に引きずりこんだ。

「んっ!?　んーっ、んーっ!?」
じたばたされると、なんだかとても悪いことをしているような気分になる。こう、弱った金髪美少女を物陰に連れ込む、みたいな。
「まず叫ぶのと、あと、名前を呼ぶの禁止で頼む！　いいな、約束出来るな？」
そんな燁澄に囁くと、燁澄は目を白黒させていたものの……こくこく、と頷いた。
ホッ、としてその手を離す。
「ぷは……え、ええと……わたし、襲われちゃうんですか……？」
真っ赤な顔で、何故かもじもじされてしまった。
「襲わん襲わん！　赤くなるなっ！　むしろ逆だよ、お前を……」
あ〜〜。
なんで俺はそんなことをしようとしているんだろうな？
そんな自問自答はもう切って捨てることにした。これが、灯花を守る最善の方法だ。そう思い込むことにする。
「お前を、手伝いに来たんだ」
「え……？　あ、つまり……その代償に体を、ということですね？」
「要らないっつってんだろ!?」
どういう脳してるんだこの聖剣娘は！　いや、これもアレか？　ジャパニーズその手の文化の影響か？

「ほっ……ビックリしました。エッチな薄い本みたいなことになるのかと……」
「……そういうのも読んでいるのか？」
「ぎくりっ」
「そういうのは、十八歳以上になってからになさい」
「は、はい……すみませんでした」
叱ったら反省するのを見て満足しそうになる。
いや、こんな会話がしたかったんじゃないんだ。
「すみませんでした。とりあえず、今はそういうエッチな話ではないんですね」
それはまるで今でなければOKみたいに聞こえるんだが、気にしないでおくとして。
「ってか、お前は聖剣なんだな？　聖剣士、ではないんだな？」
「え……え？　カガリさま、聖剣士のことを知っているんですか……？」
「あ、ああ、うん、まあちょっと詳しいんだ。実は」
上手い誤魔化しがまるで思い浮かばなかったので適当な返答になりつつ。その反応からして、やっぱりこいつ自身は聖剣で、聖剣士ではないようだ。
「で、なんでいないんだ。『カリバーン』からそういうの派遣されたりしないのか」
俺が顔を近付けて質問すると、燁澄は困ったように、恥ずかしそうに、顔を背ける。
「あ、あの……じ、実は『カリバーン』は今、ご想像されているような大きな組織ではありませんので……」

「そうなのか？」
「ハーネス家は代々頑張って『カリバーン』であり続けたのですけど、既にもう名前ばかりの組織で……今となりましては、わたしくらいしか聖剣はいないんです」
衝撃の事実だった。
「国際的な防衛機関ってのは？」
「過去の栄光です。わたしは『カリバーン』最後の聖剣として頑張って、ゆくゆくは再興させるつもりですけれど……」
つまり、なんだ。聖剣の組織というものはもう全く頼れないってことか。
どうしてそんな国際的な防衛機関が衰退してしまったのかは解らない。そういうのはもう後でいい。今は『こいつに聖剣士がいない』こととこの街では、他の聖剣の援護は何も期待出来ない、というのがよく解った。
「適当に凄いヤツを聖剣士にすればもっと全力を発揮出来るんじゃないのか？」
「そんなこと出来ません！　聖剣士と聖剣は運命の繋がりです。わたしの『聖剣の刻印』からその『真名』を読み取ることが出来る方か、わたしが将来を誓った方以外には教えられません！」
……そういえば灯花の時もそうだったな、なんて数年前のことを思い出す。
灯花の場合、刻印の場所が胸の辺りだった。当時はまだ小学生だったからそんなに罪悪感はなかったのだが、今はすっかり育ってしまって大変申し訳なくてならない。

「ぐむむむ……」
ともあれ、ともあれだ。なんとか現状を打破するにはどうすればいいか考える。こいつがこのまま負けたら、計都は校舎を焼き始めるのだろう。それはこのまま『レーヴァ・テインの聖剣士』が来なかったとしても同じことをするはずだ。
そして……これは最悪の予想なんだが、きっと灯花は「兄さんがいなくとも私がやらないと」とか言いながら、この燁澄みたいに聖剣士抜きでも頑張ろうとするかもしれない。だがあいつは燁澄以上に戦闘訓練の経験なんてない。結果は火を見るよりも明らかだ。
と、なれば俺が灯花と合流して計都をやっつけるという案になるわけだが。
屋上で見守るであろうアーリとラスティは、そんなことをすれば流石にそろそろ俺の正体に気付いてしまうかもしれない。俺はついさっきまで一緒にいた男なのだ。サクッと容疑者に入ってしまうのは避けられないだろう。そうなったら、俺の平和な年末年始はもうなくなってしまう。
……ぐむむむ。
こうなったら、手はひとつしかないのだが。ないのだが……くっそ！
俺はもう意を決して、燁澄に再び顔を近付けた。
「ところで燁澄。運命って信じているか？」
「は、はい？」
「例えば。お前がこうしてピンチな時に、突然現れた男がお前の『刻印』を見ただけで、

その『真名』を読み取ったりしたら……」
「そ、それは正に、運命的な出会いですけど……『刻印』は誰も読むことが出来ない古代の文字です。なので、わたしがその『真名』を教えるか、それこそ運命的にたまたま読める方でなければ……」
「そのたまたまを信じるか、って話さ」
俺は間近にある燁澄の耳元に囁く。
「ふぁ……ど、どういうこと、ですか……」
燁澄の顔がみるみる真っ赤になる。
「燁澄、お前の『刻印』は……どこだ？」
「ふ、太もも……です……」
真っ赤な顔のまま、燁澄は自分のスカートをギリギリまで上げる。
大変白くて、いい形をした右足の太ももが露出された。思わず見とれそうになるが我慢して『それ』を探す。
かなり腰に近い位置にその不思議な紋様はあった。
ズキッ、と目の奥と共に頭が痛くなった瞬間――。
「――『光裂く閃神の剣』。それがクラウ・ソラスの真名だな？」

俺の瞳はその『刻印』に刻まれた彼女の『真名』を読み取っていた。
「っ!?　わ、わたしの剣の、真名を……!?」
燁澄は目をまんまるにして俺を見上げる。
「燁澄。俺がお前と出会うのは――運命だったんだ」
「運命……ですか……」
ぽーっと真っ赤になった燁澄を見て。
「俺がお前の聖剣士になってやる。だから――その身を預けてくれ！」
「はい……カガリさま！」
燁澄が抱きついてきて、俺はその太ももに手を添える。その瞬間、その『聖剣の刻印』からクラウ・ソラスの情報が怒濤のように俺の中に流れてきた。これで契約は完了。後はこの読み取った情報をフルに使うだけだ！
「んっ……わたし……『光裂く閃神の剣』を……貴方に捧げます」
「ああ、行くぜ！――聖剣、解放!!」
瞬間。圧倒的な青白い光が燁澄と俺の体を包み込んだ。
「ふぁ……あああっ!!」
燁澄が色っぽい声を上げて、光の中でその人としての輪郭を失っていく。
「あん？　なんだこの気配は……」
計都がこっちを見た時には、俺は校舎の陰でマフラーで顔を隠していた。口元だけでな

く頭までぐるぐる巻きにして、目だけがちょっと見えるくらいまで念入りに覆う。視界がとても悪いが、そんなことを言っている場合ではない。

俺の手首と足首辺りに、青い光の輪が浮かび上がった。そして、俺の両手にその光と同色の光を放つ双剣が現れる。

計都がこの強い光に気付いてドラゴンの頭から起き上がった時には。

俺はその光を用いた推進力を使って、一瞬で接近していた。

「あん？　なんだお前……」

計都の油断がまだ継続している、その隙に。

俺は両手の剣を逆手に持つと、跳躍して――ドラゴンの目を突き刺す。

刹那、激しい炎がその目の傷口から吹き出した。

「ぐっ……ぐあああああっ!?」

見れば不思議な光に包まれた計都は、両目を両手で押さえていた。その計都本人の体が、何度か明滅して霞んでは現れる。こいつとこのドラゴン……確か『真紅の炎神・燭竜』は存在がリンクしているということらしい。

つまり、燭竜に攻撃すれば計都も同時にダメージを受けるということだ。これが女の子だったら罪悪感に苛まれていたのだろうが、こいつはいかにもバトルジャンキー。胸の痛みはほんのちょっとしか感じないで済む。

そのまま俺は追撃をすることなく高く跳躍した。

信じられないことに、軽く跳んだだけで四メートルくらいは高く跳べる。どうやら燁澄の聖剣は俺の身体能力を飛躍的に向上させる力があるらしい。

ゴオウウウッ!!

今まで俺がいた場所を、強力な炎の塊が行き過ぎる。

流石だな、計都。奇襲の驚きと目の痛みに怯むことはあっても、即座に攻撃の手を緩めるような油断はしないということか。

「貴様――！」

計都が俺を見上げる。だが、俺は双剣を既に十字に合わせていた。

火の塊が俺と計都の間に発生した――と同時にもうその炎に十字の形をした光の斬撃を放つ。

バシュッと炎がかき消された時には、俺はそのまま地面に向けて落下。横に手と剣先を伸ばして燭竜の首を突き刺すと、重力に任せて下まで引き裂くように斬りつける。

「がっ、あああああっ!?」

計都の絶叫が聞こえた。それだけで口の中に苦いものが広がる。

やっぱり誰かと戦うっていうのは、誰かをわざわざ苦しめるってのは、胸が痛む行動だ。出来ることなら本当は戦いたくなんてない。そもそも計都は戦闘を楽しんでいるだけだし、『まだ』校舎に被害なんて出していない。つまり『まだ』悪いことはしていないのだ。

だが。

俺が地面に着地した時には、燭竜の足元からは炎の波が生まれていた。
そう、だが。
計都は強い。痛み、驚愕、苦しみ。それらをすぐに乗り越えてこうして次の攻撃を放ってくることに迷いがない。『敵を倒す』という意識に全くぶれがない。こういうのは本当に恐ろしい相手だ。
『強敵』
だからこそ――俺はもう一度跳躍する。
「クハハハッ、そう来ると思ってたぜ――いくぜ俺の『魔竜咆哮』、『炎竜焦土』!!」
頭の前まで跳んだ時、計都は笑っていた。戦いを楽しんでいた。そうでなくてはここまで『強敵』にならなかっただろう。
「俺もそう思っていたよ」
「あ?」
着地した時に現れていた炎の波は陽動で、逃げるには上に跳ぶしかない。そして、そこには燭竜の大きな顔があり――その口には紅蓮の炎が溜まっていた。
そう。『強い』ならそうするのだ。相手の動きと行動を把握して『それ以外の行動』が取れないように方向性を仕向け、そして最後に決め手を用意する。
だから俺は。
『出来るよな、燁澄?』

『も、勿論ですっ!』
自分の『動きたいイメージ』を燁澄に確認した時にはもう『そのまま直角に移動』。
つまり、上に跳んだ俺の体は途中でいきなり軌道を変え、地面と水平に移動した。
「なっ!?」
最初にダッシュした時に把握していた。『クラウ・ソラス』の速度はこの『光を使った推進力』から出るものだ。解りやすく言えばジェット噴射。これを意のままに使うことによって、縦横無尽な軌道を『空中』に描くことが出来る。
だから、それを最大限利用する戦法を取った。最初に走り、ジャンプして、奇襲。そして何も小細工はせずに炎の攻撃を更なる跳躍で回避し、そのまま落下。そんな特殊な軌道を持った動きは出来ない、というのを計都に示したのだ。これで相手が『戦況』を読むならば。本当に『強敵』ならば。その先に罠を仕掛けるだろう。
良かった、計都が本当に強くて。良かった、計都が戦いに長けていて。
俺は、ずっと前から。
灯花が聖剣なんかになってしまった日から。
そんな『強敵を倒す為の方法』だけを鍛え上げたのだ。
「まっ……まさか……」
計都の声は、光の推進力を使って飛ぶ俺の耳に正確には届かなかった。
――俺の体は、今正に炎を放とうと広げた燭竜の口の中に突き進む。

ちょっとやそっとの炎くらいだったら耐えられることを、さっき炎の波に飲み込まれた燁澄が見せてくれた。だから『放たれる前』の炎の息くらい大したことはない。
ボッ、と服に火が点くのにも構わずに。
俺はその推進力を利用して、青白く光る剣を燭竜の口の中に突き立てた。
――防御力に自信があったラスティの『ラドン』はこれで倒せたのだから。
計都の『燭竜』にも通じるはずだ。

ザシュッ！

「が……ぐあああああああああああああっっっ!?」
聖剣に深く口内を切り裂かれた瞬間、計都の体が仰け反って絶叫を放つ。
手応えはあった。聖剣が魔竜の存在を『斬った』感触。それが手にも、そして感覚としても把握出来た。
俺が突き刺した先で燭竜の体が青白い粒子になって消えていく。
それは『真紅の炎神・燭竜』を『クラウ・ソラス』が倒した瞬間だった。
『す、凄い……あっさり倒してしまいました……』
頭の中で燁澄が感動しているが……。
俺はこの推進力を更に使ってやらなければいけないことがある。

そう――。
「とんずらだ……!!」
きっとアーリやラスティもそろそろ屋上に戻っているはずだ。
だったらそいつらに何も見つからないよう、放つ光を最大限にして、とにかく遠くに逃げなければいけない!!
『え、どうしたんですか……？　あ、なるほど！　ヒーローは颯爽と去るんですね！』
よく解っていない燁澄に説明することなく、俺は全身全霊で光の推進力を使って、校庭はおろか学校の敷地のはるか遠くへと逃げる。
計都も、アーリも、ラスティも見ていない先の先へ――。

ともあれ、俺はこうして――ほとんどノリみたいなもので。
『火の魔竜・計都』を倒したのだった。

◆幕間――魔竜姫　其の二――

計都が倒される様子を、私はラスティと見ていた。
……まるで深遠なダンジョンのように果てしない放送室から屋上までの道のりを、なんとかラスティをきちんと導きながら（ラスティはとても困ったような顔をしていたけど）制覇したおかげで、戦いの決着直前にしか間に合わなかった。
だから、そのバトルっぷりを見られたのは最後の辺りだけ。
計都が必勝の顔をした瞬間に絶望したところからだった。
しかも『聖剣士』は『燭竜』を倒したと思ったらもの凄いスピードで逃げていく。
「どういうこと」
隣でビックリした顔をしているラスティに尋ねてみる。
「わ、解りません……燁澄（かすみ）さん、ではなかったようです……」
「うん。男の人っぽかった」
光に包まれていたからハッキリ見えたわけではないけれど。
なんとなく輪郭は男子のモノだったような気がする。
「彼女の聖剣士が、危機的状況にギリギリ間に合った……のでしょうか？」
「もしくはこの場で『契約』したか」

「どちらにしても、タイミングがおかしいと思います」
その通り。ほとんどの生徒は帰っていた。
残っていたとしても聖剣か魔竜くらいだろうと思っていた。
だからこそ、この状況を利用して『レーヴァ・テイン』を見つけようと思ったのに。
まさか『クラウ・ソラス』が計都に勝ってしまうなんて。あの戦いっぷりだったら、ほぼ百パーセント勝てないはずだったのに。どんなどんでん返しだったのだろう。
それとも、私たちが見ていたから『聖剣士』を出し惜しみしていた、とか？
「……まあ、いい。――強い聖剣が増えるのは期待通りだから」
私がいつか戦うターゲットの一人に『クラウ・ソラス』が入っただけ。
今度燁澄に会ったらブラボー、と褒めておこう。その時、聖剣士についても教えて貰（もら）おう。彼女の性格ならあっさり話してくれそうだし。
「アーリ様……私も含めて、なので恐縮ですが。『六皇魔竜（ゼクスドラグナー）』が倒されるのが早過ぎるのではないでしょうか？」
「あ、確かに。まだたった二日だった」
私が来てからたった二日しか経（た）っていないのに、もう二人もやっつけられてしまった。
勿論、ラスティも計都も生きているからいつでもリベンジは出来るのだけど。
「……もしや、この街にいると言う『あの魔竜』の仕業では……？」
「『運命を操る魔竜』の噂？」

「はい」
それは私が今一番会いたい魔竜だった。
ラスティの言う通り、もしもそんな凄い魔竜がいるのだとすれば、納得出来る。私たちの運命すら操作してしまうような。それは黒幕ちっくな人なのだろうか。それとも、私よりも圧倒的に強いから『運命』すら屈服させたのだろうか。興味は尽きない。
「もし本当にいるなら。会ってみたい。そして……」
「戦いたい、ですか。アーリ様」
「うん」
私は『運命』にどこまで対抗出来るのか。
それをとても試してみたい。だから……。

「この街はやっぱり面白い」

聖剣士が去って行った方向を見ながら、私はうきうきする気持ちを抑えることが出来ずにいた。

最後まで立ち読みしてくれて
どうもありがとう！
続きは本で楽しんでね！

オーバーラップ文庫